

十五年

つぶやきの

病

九折空也

エッセイ I

作品の恐怖と手掛け方

エッセイ II

へのへのもへじの同一性

エッセイ III

風情がないのは才能がないからだ

短編小説

十五年つぶやきの病

エッセイ IV

ボカロPと呼ばれる人たちはどうな音楽を聴いてきたのだろう

エッセイ V

A Bトンネル

エッセイ VI

性的野心

エッセイ VII

あなたのうらやましいことは何だろうか

エッセイ VIII

人はさびしいと自我に穴があく

エッセイ IX

鉄の板

エッセイ X

十五年つぶやきの病の真相

作品の

恐怖と

手掛け方

それが本当にヤバい。

なぜそんなことがヤバいのかというと、そのヤバさはやはり、そこに入り込んだ者しかわからない。

なんとか、たとえるなら、就職面接を百社受けて、百社とも落ちたというときの感覚だ。

そんなことになつたことはないけど、きっとそういう感覚だ。

百社受けて、百社落ちたとしたら、どうなるか。

それはもう、百一社めは、受ける前から「落ちる」とわかるということだ。

それがヤバい。

しかもだ、前もって、面接の最中から「あっ、これはダメだな」とわかるのならまだいいのだ。

そうではなく、面接の最中はわりとふつうなのだ。

何であれば、途中まで、「感触はすごくよかつた」「手ごたえあった」と感じている。

面接官もニコニコ、ほほえんでくれている。

にもかかわらず、百社連続で落ちる。

何がいけないというのだ、何が理由で落ちているんだ。

理由がわからない。

理由がわからない、というより、「そもそも落ちるもの」のような気がしてくる。

こうしたことは、他人事としては「へえ」と笑いごとで済むが、じつさいにそこに入り込んだ者にとっては恐怖だ。

パニックになり、恐怖に押しつぶされる。

このパニックと恐怖は何なのだろう。

それは会社に入れない、ということの恐怖ではない。

面接で、どんな顔をして、どんな声を出し、どんな話をし、どんなアピールをすればいいのか、もはや一ミリもわからない、という恐怖だ。

キリッとした顔で面接室に入る。

「でもこれも違うんだろうな」

ニコニコした顔で面接室に入る。

「でもこれもダメなんだろうな」

朗々と、なるべく大きな声でいさつする。

「これってダメなやつ？ たぶんそんなんだろう」

ていねいなお辞儀をして、ていねいな話し方をする。

「たぶんこれで落ちるんだよね？」

もう、何をどうしたらいいのかわからない。

あ、別の例を思いついた。

あなたがおしゃれをして、デートに行つた。すると相手から「ダサイ」

と言われた。

それで落ち込んだが、奮起して、おしゃれ雑誌を読み込み、コーディネ

ートをあたらしくした。

しかし、「よりダサイ」と笑われた。

やむをえず、おしゃれな友人に頼り、コーディネートを決めてもらつ

た。

すると、舌打ちされて、「いままで一番ダサイ」と言われた。

しようがなく、一般的なスースツ姿で行くことにした。

ため息をつかれて「違う」と言われた。

どうしたらしい？

もう何もかもわからない。

それではあなたは、翌週、オーディションを受ける。

審査員は十人。自分に似合う服を着てきて、十五分間、自己PRをしてください、と募

集要項に書かれている。

どの服を着るべきか、どんなPRをするべきか。

一ミリもわからない。

「よし、これでいこう」

昨夜はそう思つた。

でも今朝になつて、

「違う、ぜつたい違う」

という確信がある。

じゃあどうすればいい。

どうすればいいといつて、それが一ミリもわからないのだ。

またため息をつかれて、またダサイと言われて、また「違う」と言われて、また落とされる。

審査員十人が、ジロジロ見てきて、首をかしげたり、隣に耳打ちしたりする。

につこり笑つても「何それ」、キリッとしても「何それ」。

もはや、面接とかオーディションとか、合格とか落選とか、そんなことはどうでもよくなつていて。

そんなことより、とにかく「わからない」。

正解がわからない。

正解なんてない、ということはわかっているが、そんなことは屁理屈だ。

とにかくマジでわからないのだ。

友人に何か、笑い話ををしてみる。

以前まで、そういう無駄話は得意だったのだけれど……

それが本当に、面白い話なのかどうかわからなくなつてくる。

友人が悩んでいる話を聞いて、

「○○ちゃんなら、きっとできるよ」と励ました。

それはわれながらまともな応答だったと思う。

けれど、帰宅してひとりになると、

「あれっ、わたし、何かへんなことを言つたんじや……」

自信がなくなつてくるか、あるいは、

「そもそも、自信なんて何一つなかつたんじや？」

いつたい、何をもつて、これが正しいとか、これがイケているとか、思つていたんだろう。

すべてはただの思い込みだつたんじやないか。

そうなると、何かゾッとしてきて、

「自分の何もかもが、間違っているような気がする」

こうなるともう、日常から、すべての挙動が引き攣（つ）つてくる。

なるべく、自分がへんな奴にならないように、当たり障りのないキャラ

を徹底して演じるけれども……

それでも、

「自分はやつぱりへんなんじゃないか」

じゃあどうすればいいか。

その、どうすればいいかが一ミリもわからないのだ。

いろんな本を読んだり、いろんなウェブサイトを漁れば、「こうすればいい」というような、便利そうな見える方法が書いてある。

その本やウェブサイトや、動画のタイトルやサムネイルには、惹きつけられて期待がワッと湧いてしまうのだが、すがつたところでけつきょくのところ、そこで聞かされた話を自分でまつとうしようとすると、「いや、だから、そこがわからないんだって」ということが出てくる。

なるべく言われたとおりに、書かれてあつたとおりにしようと思うが、

結果、「別に何も変わらないっていうか、これ、いつものわたしじゃん」ダメじゃん、ということになる。

このとき、もう目つきがへんになっている。

内部で、思考が何か「ギリギリ」になっているのだ。

感情が意味不明に鳴動し、自分でもびっくりするぐらい、急に怒りだしたりする。

何に怒っているのか自分で意味不明だ。

しかし怒りが大爆発している。

自分の声が、異様にわざとらしく、作り物のようで、「えっこれ、誰の声？」と自分でびっくりする。

何か決めゼリフみたいなことを言って、キメ顔をして、自分で「なにこれ」と思う。

あはははは！

えっ、何この笑い声。

ああ、もう、誰か助けて。

その助けを求める声も何かわざとらしくておかしい。

なんなんだこれは、脱出不能だ。

作品というのは、だいたいこんな感じになってしまふ。

作品はヤバいのだ。

何がヤバいのかは、そこに入り込んだ人しかわからない。

何がヤバいといつて（二回目の説明）、作品の良し悪しとかではなく、また作品が出来ないということでもなく、作品にかかわって徹底的に、「わからない」

ということがヤバい。

自分を構築しているすべての感覚や認識が役に立たず、引き攣つて、軋（きし）みはじめてしまう。

ああ、もう、繰り返せばよいルーチンワークだけを仕事にして、それだけで生きていきたい、と思う。

ルーチンワークの業務は怖くない。

もうそれを数年間も続けていて、何をすればいいかわかつているし、や

るべきことをやつていたら、怒られたり否定されたりすることもないから。

ルーチンワークの業務は怖くないのだ。

作品は怖い。

無限に、永遠に、否定されづけ、最後の最後まで「わからない」かもしれない。

前進するということがない。

わからない森を前進して、わからない池にたどりつき、わからない池を

前進したら、わからない草原に出た。

それを前進していくと、別のわからない森に入り込んだ。

こんなものを前進とは言わない。

ただの遭難者だ。

作品が生じるつてどういうことよ。

手元にどんな地図があつたとしても、

「いやだから、地図はわかつたけれど、この地図のどこに、作品が生じる

場所があるかつて訊いてんの」

うねうねくん。

あるいはによろによろくん。

やがて書物が問われる。

あなたの書物はどれか。

書物以外の作品も、書物と扱われる。

作品ならすべて同じだ。

作品が「生じる」というのはまつたくのナゾだ。

魂魄の空間で、魂魄が交わらないと、作品は生じない。

魂魄が交わると作品が生じるのであって、逆に言えば、作品を生じさせ

るための、センスとかアプローチとか、そういつたものは必要ない。必要

ないというより、そもそも存在しない。

塩酸と水酸化ナトリウムを反応させると、食塩が生じるが、そんなこと

にセンスとかアプローチとかは存在しない。

交われば生じるというだけだ。

人が恣意的に何かをしているわけではないし、恣意的に何かをする必要

はないし、恣意的に何かをすることじたいできない。

作品は、生じてからしか手掛けられない。

これは大事なことだ、知つておいて損はない。

作品は、手掛けながら生じるのではない。

生じてから手掛けるのだ。

生じてから手掛けるといつても、すでにそれは生じているのであって、
手掛けるといつても、ほとんどクリエイティブな作業はない。

クリエイティブな作業なんて存在しねえんだよ。

クリエーションの事象を受けて、受けたままを現わすために、必要な身体性や伎倆はあるが、クリエーションの事象じたいを、人が手掛けることはできない。

うねうねくん、なんてアホみたいなことを言つてゐるが、そこにおれの
独特のセンスなんかがあるわけではない。

魂魄の空間、非観測の空間で、魂魄が交わり、そこに作品が生じる。

それが生じて「から」、わたしはうねうねくんと言つてゐるのだ。

何も生じていないのに、勝手にうねうねくんと言つても何にもならない

い。ただの、センスがあるふりをした、寒いものになるだけだ。

そんな寒いものを振り回すなら、わたしは人に媚びなくてはならなくな

るだろう。

生じて「から」、手掛ける。

そうでないと「出来事」にならない。

出来事になつていなら、何かが「出来る」「出来上がる」ということ

はありえない。

うねうねくん。

そしてわたしの書物が著わされる。

作品が生じる、それが「わたしの出来事」になつてゐる。

わたしの出来事でなきりやわたしの作品であるわけがねえよ。

せいぜいヒントとしては、その「生じる」ということに敏感になり、「生

じる」ことなしに、手掛けるということを勝手に始める、ということぐら

いだらうか。

これは、テキトーに書いているが、爆裂ウルトラ大切なヒントだ。

ものすごく根底的なメソッドを公開してしまつた。

無料だ、もつてけ。

生じて「から」、手掛ける。

生じたものに手掛ける。

生じたものに従つて手掛ける。

魂魄はどのようにすれば交わってくれるのだろうか？

それは、「みだりに」をやめれば交わってくれる。

樹木Aと樹木Bが並んでいて、それぞれの樹木の「うろ」には、リスが棲んでいる。

樹木Aにはオスのリスが、樹木Bにはメスのリスがいて、この二匹のリスは、どうしたら出会い、交わつてくれるだろうか。

それは、簡単だ、その樹木の足許でやつてある道路工事をさつさとやめればいい。

ドカンバタンバキキズコーンと、樹木の足許で大騒動をやつてあるから、リスたちはうろから出でこないのだ。

樹木をユサユサするな、リスたちはますますうろから出でこない。

静かにしてやれば、ものの数分で、二匹のリスはそれぞれのうろからひょっこり出てくる。

交わるのは勝手に交わる。

いつものことだ。

われわれが「みだりに」、騒動を起こしてあるから出でこないのだ。禪僧が壁に向かって座つているのは、あれは何をしているのか？

何をしているといって、何もしていない。見たらわかるだろう。何もしていらない。何かをしているわけがない。

何をしているかというと「坐（すわ）つてある」のだ。それ以外のことをしてはいけない。

まあ、じっさいには、わたしは坐禅に成功している人なんて見たことないけれどね。

（道元と、澤木興道禪師を除く。実物は見たことないけれどね。）

坐つたりや、魂魄が勝手に交わるといふこと。

それが坐禅というメソッドだ。

それで、三千世界でも観解するのかね、おれは知らん。やつたことがないので知らん。

魂魄が交わるのは、ただの魂魄の性質であつて、われわれの恣意ではない。

うねうねくん。
やがて書物が問われる。

念じるな、唱えるな。

そのみだりな騒動をやめる。

その騒動のたびに、リスたちがぴゅーっと「うろ」にあわてて逃げかえつているのがわからないか。

じっくり内部で観察したらわかるかもしれない。

あなたが内心で、思つて、念じて、唱えて、うごごごとやるので、その瞬間にぴゅーっとリスたちは逃げ帰つているだろう。

エモるな。

エモるという動詞があるのかどうかは知らないが、エモるな。

「やがて書物が問われる」

そう言わると、わけもわかつていないくせに、まるで食いつくようにエモる。

そのエモりじたいが騒動になつてゐるので、もとの味が消えるのだ。やがて書物が問われるんだつてば。

そういうことなら、取り掛かれるでしょ。

手掛けるのは、生じてからだ。

だから、うねうねくんだ。

生じる前から手掛けてはいけない。これは巨大で最高のヒントだ。やがて書物が問われる、じやあ……うねうねくんとなり、作品が生じた、さあ手掛けなさい。

やがて書物が問われる、じやあ……うねうねくんとなり、作品が生じた、さあ手掛けなさい。

このことに力があり、魂魄が交わる。

交わりと生じるものは、うねうねくんという感じだ。

うねうねくんに従うしかない。

「やがて書物が問われる」

「そういうことなら……」

このやりとりは暗記しておいてもよい。

やがて書物が問われるなら、書物（作品）に取り掛かりましょう、といふ、単純な文脈があるわけ。

あなたは社会人になつたら名刺を持つただろう。また、いまはまだ学生

の人も、社会人になつたらすぐ名刺を持つだろう。
なぜか。

なぜかといつて、そりや、

「やがて名刺が問われる」

からだ。

取引先から「お名刺をいただけますか」と求められるので、名刺を刷り、名刺を持つようになるのだ。

誰からも求められないなら名刺なんて刷らない。

当たり前すぎるのことだ。

それと同様で、やがて書物が問われるから、書物（作品）を持とうとするのだ。

騒動をやめたなら、いつのまにか自分は出来事の中に立っている。

「やがて書物が問われる」ということばを在（あ）らしめて、そのとき騒動さえしなければ、いつのまにか自分は出来事の中に立っている。

出来事の中というとか、出来事の面前というか。

その出来事は、うねうねくんとしていたり、によろによろくんとしていたり、うによくによくんとしていたりする。

そこは何でもいいのだ。

必ず、魂魄が交わって何かが生じて「から」、それに従つて作品を手掛けなさい。

〔作品の恐怖と手掛け方〕

△の△の△も△じ

同一性

ああ、エッセイ。

こんなものはエッセイなのだ。

かつて、エッセイというのは、この世でいちばんダサいものだつた。

それが、みんなに見捨てられ、ついに逆転して、何かここでは素敵なものになつた。

おれだけかもしねないけれど……

こんなものはエッセイなのだ。

まじめな話なんかしていられるかよ。

エッセイとか私小説とか。

私小説はマジでダサいな。

しかし、それはシティボップのようにダサいので、うまいことしたら、素敵な何かになるかもしれない。

これはもはや昭和でもないし平成でもないし令和でもない。

何か独自の元号の中をさまよつていこう。

エッセイの中で、いろんなことを教えられてしまうから、おれはスゴイのであつて、また、エッセイの中で教われないなら、何も聞こえてこないから、けつぎよく教われねえんだよ。

ヘボ教授が書く論文には、何のエッセイも聞こえてこないが、ほんまもんの学者が書く論文には、エッセイが聞こえてくる。

それはもう、論文というか、直接の学門だよな。

直接の学門が書いてある。

そういうのは、もう单なる学者という身分ではなく、その人自身に至つ

ているのだ。

そういうのが聞きたいし、そういうのを教わりたいよなあ。

あなたは、作品うべこらぼえぬきりやああえ、しまつた、タイプミスし

た。

あなたは、「わたし」といって自分を指差せ。

言われたとおりにやつてみろ。

あなたは自分の顔面を指差しただろう。

顔面を指差して、

「わたし」

と言つた。

そしてたいてい、指差した先は顔面の中心線に近く、だいたい、顔面の真ん中寄りになることが多い。

目と鼻のあいだぐらいになることが多いかな。まあそのあたりは人による。

右手でやれば、顔の右側に寄るし、左手でやれば、顔の左側に寄りがちだ。

右手が顔の左側まで行くことはほぼない。

「わたし」

と指差す。

書物なんでもう、改行してあつたらそれで書物だよね（この一行はまつたく要らない）。

あなたが顔面のぼんやり中央を「わたし」と指差したのは、そこにあなたの「自意識」があるからだ。

「わたし」といって、自分の膝を指差す人はいないし、自分の手のひらを指差す人もいない。

指差すならだいたい顔だ。

あるいは、「わたし」ということなら、胸に手を当てて「わたし」という

こともある。

それは、「わたし」というこころあたりが、やはり心臓周辺にあるからだろう。

そこにこころがあり、こころあたりがある。

そうでなきや、古代人はそこにある臓器を心臓とは呼ばなかつただろう。

次にあなたは、へのへのもへじを描いてみる。

ボールペンで適当に描け。

知つている人は「へまむしょ入道」でもいい。

あなたはへのへのもへじを描いてみた。

そのへのへのもへじを描いたのは誰だ。

そりやあなただ。

それはあなたの作品ということになる。

でも本当にそうかといふと、まさかそれを、「自分の作品です」といつて個展に示し、販売しようとする人はいない。

いないでもないのかな。ヘンな街のヘンな人たちは、そういうものを作りがたがつて買う可能性もある。

ともあれ、そのへのへのもへじを描いたのはあなただ。

あなたは、そのへのへのもへじを描いて、それを指差し、「わたし」と言つてみる。

ん？

指差したそれに、「わたし」という感じはしないだろう。

指差した先にあるのは、へのへのもへじという、よく知られた記号パターンだ。

描いたのは「わたし」だけどね。

指差したそれは「わたし」ではない。

ただの落書きだ。

これが問題だ。

あなたが入念に、画力をふりしぶり、キュビズムとリアリズムに満ちた、キュウリとレンコンとハダカデバネズミの絵、それも三者が必死にな

つてラッパを吹いているという絵を描いたとする。

あなたはその絵を指差して「わたし」と言う。

それは「わたし」か？

いや、それを指差して「わたし」はおかしい。
それはキュウリとレンコンとハダカデバネズミだ。

描いたのは「わたし」だけね。

これが問題だ。

へのへのもへじと同じなのだ。

画力の問題ではない。

モチーフは、半分は本質的な問題だが、そのモチーフが「わたし」でないのなら、けっきょくモチーフも問題ではなくなる。

自分で描いたのに、指差したそれが「わたし」と言えないのだ。

つまり、同一性がないということになる。

おれはここに、技術的に拙劣な文章を書きなぐっている。

だが、おれはこの文面を指差し、

「おれだ」

と言いうる。

おれの文章はおれと同一性を持つている。

これは「おれ」であり、だから、落書きではない「書物」になつてい
る。

ここに、何かおれのイメージーションがあるのか。

ないな、見たらわかる、見たとおり、ないわ。

ではここに、おれの気持ちが語られているか。

ないな、気持ちって、むしろ「この人どういう気持ちでこれを書いてい
るんだろう」と疑問にしか思わない。

ここに、パッションがあるのかというと、まあ何かしらのパッションは
あるのかもしれない。

ここに、おれのホンネが出ているのかというと、どこをどう見ても、こ
こにこの書き手のホンネなんてものは見当たらない。

にもかかわらず、ここに書かれているのは直接「おれ」だ。

おれが書いているという事実だけじゃなく、これじたいが「おれ」とい
うことがある。

同一性だ。

おれがあなたの目の前でへのへのもへじを描けば、その当たり前の営為
の途中で、あなたは、

「あれっ……？」

とへんな感じを覚えるだろう。

頭がぐわーんとする。

なぜかわからないが、イライラしてきたり、怒りだしたり、異様なキヤ
ラになつて何かを言い出したりする。

おれが絵を描くのを妨害しようとしたりする。

冗談でなく、物理的に、手を突っ込んできたりして、差し止めようとす
ることがある。

発作的にだ。

そんなことが本当にあるものだ。

それで、だいたいあとになつて、

「わたしそんなことしましたっけ？」

と、マジのようなどぽけたような、びっくりの仕方をするのだけれど。
なぜかわからないが、自分の全身から、ナゾの悪いガスが出るのだ。
他人の同一性営為を阻害しようとする、広範囲に及ぶ悪いガスをまき散
らす。

自分の意思ではその噴出を差し止められない。

（いや、本気になつたらそりや止められるけれど）

頭がぐわーんとなつて、そのとき何かに取り憑かれているから、本気で
それを止めようとは思わないものだ。

感情的にはなるけどね。

この人の営為には同一性がある、というだけ。

この人が手掛けることには同一性がある、というだけ。

ただそれだけだが、大騒動になるのだ。

ことは、へのへのもへじの時点で現れている。

誰でもへのへのもへじは描けるし、絵が上手な人は、へのへのもへじだつて何かしらアレンジして、かわいくきれいに、目立つて印象的なものとして描くことができる。

アーティスティックに描いちやつて、その行程を、Youtube のショート動画にアップロードする人もいるのだ。

が、問題は、それを指差したときだ。

それが上手であっても、それが「わたし」かどうかは別だ。

もちろんその絵が販売されるとして、その売上金は、描いたあなたのものだ。

その意味では、指差したそれは「わたし」のものだが、もしそれが売れなかつたらどうする。

売れなかつた場合は、「わたし」がなくなるのか。

「わたし」の存在は、認められなかつたので、「わたし」はまだ存在している気がする。

そう思つてゐる人はけつこう多いのだろう。

そんなあなたのことは、広辞苑に載つてゐる。

調べてみると、【あほ】という見出しのところに、あなたのことが書いてある。

【あほ】 あなたの同一性を他人に恃（たの）んでどうする。

絵が一万円で売れたとき、その一万円はあなたに与えられるだろう。だから、あなたと絵は同一性があるということになるのか。

それはただの所有権だ。

あるいはただの著作権だ。

そのとき、自分の知性はハダカデバネズミに劣ると反省しろ。

もういちど、あなたは「わたし」といつて自分を指差せ。

すなおにやれ、あなたは自分の顔を指差すだろう。

ここであなたに、完全完璧な、生命維持装置をつけることにする。セツ

ト。これで何をどうやつてもあなたは死なくなつた。

そこで、あなたの下半身を切り離してみた。あなたは死なない。

あらためて、あなたは「わたし」を指差してみなさい。

あなたは引き続き、自分の顔を指差してゐるだろう。

下半身を切り離しても、あなたの「わたし」は、下半身のほうには飛んでいかないらしい。

ひきつづき、あなたの顔面に「わたし」がある。

では思い切つて、胸から下も切り取つてみよう。

それでもやはり、あなたは顔を指差し、「わたし」と言うことができる。ではつぎに、あなたの顔面を、ちょうど真ん中から、縦に割つてみよう。

あなたは死はない。

完全完璧な生命維持装置につないであるから死はない。

死なないつて前提してあるだろ、悪あがきをするな。

剣豪が斬つたスイカ割りのように、あなたの頭部は右と左にまつぶたつに分かれた。

右頭部と左頭部は、二メートルの間隔をあけて、それぞれ台座に設置されることになった。

このときあなたの「わたし」は、頭部の右半分か、左半分、どちらにあらんだ。

それとも「わたし」は、ふたつに増えたのか。

さらに考えよう。

スーパースライサーを持つてきて、あなたの頭部を、水平に輪切りにしていく。

あなたの頭部は、頭頂からアゴの先端まで、二十四枚の輪切りにされた。

頭頂部から順に、一～二十四の番号を振る。

あなたの「わたし」は、その輪切りのうち何番に入つてゐるのか。

きっと一番ではないし、二十四番でもないだろう。

たぶん、あるていど真ん中らへんだ。

でも、その真ん中らへんのパーツも、さらに輪切りにできるからね。

どこに「わたし」があるかなんて、じつは言えない。

漠然と、「わたし」といつて、自分の顔を指差すが、それは習慣的に自意識が引つかかる場所を指差しているにすぎない。

そもそも、あなたの身体って、皮膚も筋肉も脳みそも「細胞」で出来て

いるけれど、どの「細胞」があなたなんだ。

あなたの「わたし」って何？

まさか白血球や赤血球があなたではないわな。リンパ液も違うわな。

髪の毛の細胞なんかただのタンパク質だし。皮膚なんかさらに細胞としては死んでいる角質だし。

ただのタンパク質といえばすべての細胞がそうだけど。

しかも、あなたが設計したものじゃなくて、あなたが父母から遺伝子を受け継いだだけのものだしな。

タンパク質もアミノ酸も、だいたい炭素と水素と酸素と窒素で出来てい

るけれど、どの元素にあなたがあるんだ。

それらの元素も、けつきよく陽子と電子で、それらはけつきよくぜんぶ素粒子だぜ。

どのクオーケに、

「あっ、これボクです」

つてのが入っているんだ。

そもそも、あなたは、父親の精子と、母親の卵子から生まれたんじやないのか。

じやあ聞くけれど、精子と卵子は、いつからあなたになつたんだ。

精子と卵子は、受精して、卵割を進めていく。

一個の細胞は二個になり、四個になり、八個になり、十六、三十二、六十四、と増えていく。

「ハイここ！　ここでわたし、始まりました」

細胞が何個になつたときなんだ。

で、そうしてあなたが始まる前、あなたはどこにいたんだ。

どこもあなたではない、ただのタンパク質の細胞だったものが、急速あなたになるのはおかしいだろう。

こうして考えると、じつは「わたし」という現象は、いつたいどこに根差していく、いつから始まり、どのような状態で得られているものなのかな、さっぱりわからない。

いつもの「わたし」という、習慣があるだけで、その本質がどうなつているのかは、じつは誰にもわからない。

世界中の医者に訊いてみたらいい、まともな人は全員「わからない」とはつきり答えるはず。

救命救急医は毎日、患者の家族に向けて、

「心臓が止まっています。呼吸も止まっています。じゃあいまから瞳孔反射を見ますね。光を当てます……はい、反応がありませんね。じゃ、これで死んだってことにします」

ということをやつている。

ふざけているのではない、マジな話だ。

「えっ、これで死んだんですか」

「死んだとされています」

「本当にもう死んだんですか」

「それは誰にもわからないです」

「じつはいま生きていて、これから一分後に死ぬとか……」

「そうかもしれません、とにかく、いまやつた三つの確認で、死んだ、ということにしとるんです。いつどの瞬間に死んだのかなんて、境目は誰にもわからないんで」

「ほーん」

「わたし」はいつから始まったのかわからないし、いつ終わつたのかもさっぱりわからない。

そもそも、細胞の組み合わせから突然ジャジャーンと始まったのか、そのことじたいよくわからない。

「わたし」は、どこから来たのかもしれないし、肉体に棲んだあと、どこかに行くのかもしれない。

わからないのだ。

そもそもさつき言つたように、「わたし」が体内のどこに棲んでいるのかさえわからぬ。

「わたし」といつて、自分を指差しているつもりでいるくせにね。

むしろ理論的に言えば、元素を組み合わせてアミノ酸にし、アミノ酸を集めてタンパク質にし、タンパク質を組み合わせて細胞に、細胞を組み合わせて、それを、

「わたし！」

にする、ということのほうが理論的におかしい。

そんなもんいきなり「わたし」にやならねーよ。

すべてについて再現可能な科学しか信じないというなら、「わたし」という事象じたい否定しろ。

その、「否定」というやつをやつてているのが、「わたし」だけね。

このことから逃れられない。

どれだけ疑り深い奴になつても、この「わたし」が存在しているといふことからは逃れられない。

疑るということをやつてているのが「わたし」だからな、逃れようがない。

そのことをデカルトが指摘したのだ。

コギト・エルゴ・スムだ。

こんなことでどよめいているようでは、西洋人はアホだと言える。

これは人種差別ではない。

東洋人の誇りを示したつもりだ。

東洋の、仏教やインド哲学などでは、デカルトよりずっと昔にこの問題に気づき、それ以上のことを発見している。

色即是空、空即是色、でも仮性があるのだ。般若心経はそれでも仏教の中でイメージな教えた。

(そもそもあれが「お経」なのかどうかには疑問がある)

ヨガでもともとアートマンといい、ブラフマンと合一して、梵我一如を目指すというのが前提だ。

古（いにしえ）からの、東洋の魂を引き継ぐなら、

「わたし、なんてものは、あるのかないのか、そもそもよくわからんものです」

ということを、初歩の初步、すべての入口にしていなくてはならない。

東洋人ならわかるだろ、たとえ iPhone を使っても。

このあたり、現代人は本当に、まじめな意味でブツ壊れているのかもしれない。

本当に、A-Iが「わたし」を持つていないと、感覚的にわかっていないのかもしれない。

キヤバクラ嬢が客に営業メールをするとして、その営業メールはA-Iで代替可能だ。

あるいはアイドルが、SNSにつぶやきを発信して更新するとき、どういう文言がカワイイのか、アイドルっぽくてオタクたちに刺さるのか、そうしたこともA-Iに相談可能だ。

相談可能というか、ようするにA-Iに複数作文させて、そのうちどれかを当人が選べばいいだけだ。

「この、みつづめのやつがカワイイなあ、これコピーレして貼り付けようつと」

それなら、どれだけ頭がバーのアイドルでも、まるで氣の利いたツイートができる女の子、というふうに見せかけることができる。

まあ、そんなことをしているうち、じきにアイドルの映像そのものが生成A-Iに置き換わると思うけれど……

生成A-Iの映像アイドルでも、こっちのつぶやきに「リップ」を返してくれるようになつたら、もうオタクたちには見分けがつかなくなっているのだ。

いや、現代人には、じつはもうそのことに見分けがつかなくなっているのだ。

それはA-Iがどうこうではなく、人が、「わたし」のことばや声を現わすことができるくなつたからだ。

「わたし」を現わすことができない。

もちろんふだん、「わたし」が話して、「わたし」がしゃべり、「わたし」

がツイートしているのだけれどね。

その、自分でしたツイート、自分がしゃべったこと、自分の話す声やことばに、同一性がないのだ。

ん?

だから先ほど言ったこととつながつてくる。

へのへのもへじを描くことはできる。

が、それを指差して「わたし」と言うことができないのだ。

じゃあA.Iに描かせても一緒でしょということ。

A.Iの問題ではなく人の問題だ。

なぜ同一性のある「へのへのもへじ」が描けないのか。

なぜ、独特のセンスがあるふりなどして、無理に奇抜な調子やタッチ

で、「個性的」なもの示そうとするのか。

個性的になんかしなくていいよ、あなたと同一性のものならそれだけでいい。

その、同一性のものというのが根こそぎむつかしいのだ。

へのへのもへじを一億枚描いても、そこに自分との同一性なんか現れてこない。

怖ええよなあ。

あなたは役所に言って、住民票を取つてこい。

それに免許証と、保険証、パスポートと、社員証や学生証を添えなさい。

マイナンバーカードがある人はそれも添付して。

あなたはそれらをヒラヒラさせて、

「わたしです」

と言つてできるだろう。

おれはこのエッセイを印刷して、ヒラヒラさせて、

「わたしです」

と言つてできる。

おれはへのへのもへじの絵一枚でもそれをするだろう。

同一性だ。

ふつうはそんなことができないから困る。

何が違うのか、何をどうすればいいのか。

覚えておきなさい。

あなたが世界じゃないから悪い。

「世界!」

と言つてみなさい。

どこを指差すといつて、テキトーに目の前を指差すしかないだろう。

世界、という語の意味は誰でもわかる。

しかし問題は、あなたがそうして、

「世界!」

と言うとき、それはまるで、

「わたし!」

と言つているようでなくてはならないのだ。

なんであなたって世界と同一性ないの?

どこに住んでんだオメー、たまには冷静に考えろ。

世界と同一性がなかつたとしたら、いつたいオメーはどこに住んで、どこに生きているんだ。

あなたがコップに酒を入れて、その酒を飲むとして、あなたはまさか、「わたし」ではない酒を飲んでいるのか。

そんなもん、よく体内に突っ込む氣になれんなあオイ。

で、体内に入つたら、それはもう「わたし」だと思つてゐるのか。

そんなことないだろ、だつてグロ吐いたら、それは外に出てくるじやん。

ワインの一杯も、パンの一切れも、そりや「わたし」じゃなけりや、本質的な飲み食いじやねえよ。

世界と同一性がないのが悪い。

ワインの一杯と同一性を持ち、パンの一切れと同一性を持て、世界と同一性があるのが当たり前だ。

だからへのへのもへじだって「わたし」であつて当たり前だ。

いまこの文章は、へのへのもへじが書いています。
そう言われたら、ほれ、へのへのもへじが「おれ」だろ。
同一性があるじゃないか。

〔へのへのもへじの同一性〕

才能がないからだ 風情がないのは

いま、観光地に行くと、どこもかしこも外国人だらけだ。
風情も何もあつたもんじゃない。

これは悪口で言っているのではないし、人種差別をしているのでもない。

ただ、風情も何もあつたものじゃないのだ。

そんなこと言いながら、おれは、やつぱり温泉街の川沿いを、夜な夜な歩いていたりするのだけれど……

風情がブツ壊れるということは本當にある。

たとえば、京都に「哲学の道」というのがある。

かつて西田幾多郎が思索を深めながら歩いたと言われている道だ。

わたしはそこを歩いたことがある。わたしが歩いたときはよかったです。
が、休日にはイベントが開かれていって、そこは観光地化されており、日本中から色んなおばさんがやってきて、哲学もクソもない、というような光景になるのだった。

別にそれが悪いというわけではないが、風情を期待してきた人がもししい

たら、それはとてもかわいそうだと思う。

わたしが初めて伊勢神宮に行つたのは、中学校での修学旅行だつたはずだつたが、まるで記憶がない。

わたしの記憶に残っている、はじめての伊勢神宮は、いつぞやの夏にレンタカーを乗り回していく、真夜中になり、

「伊勢神宮まで行くか」
と思いついたときだつた。

伊勢神宮についたときは、たしか午前四時半とかで、ものすごい早朝だつた。

いまはどうかわからないが、当時はきっと、そんな早朝からでも参拝できたと思う。

それはもう、ものすごい光景だつた。

この橋の向こうは、たしかに神域なんだ、という景色があつた。

五十鈴川に流れているのは高天原の水で、そこにカミガミが色彩をほどこした錦鯉たちが泳いでいた。

古代ヤマトの国から続いている日本の森。

その中に、佇立する神殿が現れてきて、それはもう、夢のような出来事だつた。

が、参拝を終えてしばらく経ち、観光バスがはずけずけとやつてくると、バスからは大量のおばさんたちが射出され、たしまち、あの神域はどこかへ消え去つてしまつた。

くれぐれも、悪口を言つてはいるのではない。
ただ、わたしは早朝にとんでもないものを見て、とんでもないものの中を歩き、そして観光バスが来たら、それはそれでとんでもなかつたという話をしているだけだ。

何かを悪く言うつもりはない。いや本当に。

一般に知られている「観光」とは違うものもあるということを言いたいだけだ。

いま温泉街などに行くと、冗談でなく来訪者の九割が外国人という感じで、外国人のうち七割ぐらいは中国人の人という感じだ。
家族連れが多いし、たまに若い男性だけのグループもいる。
女の子の二人組という場合もあり、たまに、日本のアニメのコスプレをして歩いている女性もいる。

どのアニメのコスプレか、パツと見てわからないぶん、わたしより彼らのほうが日本のアニメ文化に通じているのかもしれない。
そして、とにかく風情がない。

わたしは、もうさんざん風情を楽しんできた組だし、風情が欲しければ

別のルートでのアプローチを知つてはいるのだが、それにしてもこの風情への破壊力は何なんだろうと、いいかげん逆の関心が湧いてきた。

誰も悪い人たちではないのだ。

何がこんなに破壊的なのだろう？

それでよくよく観察していると、わかつたことがあつた。

彼らは、温泉の脱衣所に「突入」してくるのだ。

温泉の脱衣所に入つてくるとき、その足取りと気勢が、スポーツジムや市民プールの更衣室に入るときと同じなのだ。

日本人とは文化が違うのだ、ということをさまざま目撃した。

わたしの行く温泉の脱衣所には、のれんが掛かっている。

だいたい温泉というのはそういうものだろう。そして日本人は、何も考えていなくても、いちおうその暖簾（のれん）に対し、「くぐる」という動作をする。

われわれはのれんを「くぐる」のだ。

しかし外国の人は、スクリーンの向こうにエンターする、という動作しかしない。

まるでアミューズメントエリアに入るみたいにだ。

びっくりした。

もちろん、それは文化が違うのだから当たり前のことだ。

それで外国人の人は、脱衣所の「すのこ」に、ガコンガコン蹴りを入れるような歩き方で、脱衣所に突入してくる。
わたしはじつと観察を続けて、次々に、その「突入」が繰り返されるのを見て、しみじみと、

「なるほどねえ」

と思つた。

日本人は、のれんをくぐる人たちなのだ。
これは人種差別で言つてはいるのではない。

本当に、文化が違うのであって、その文化はきっと、口で説明されても体得されるようなものではない。

のれんを「くぐる」ということ、そう説明するだけなら数文字で済むことだが、説明されたからといって伝わるわけがない。

これは情報ではなくて継承なのだ。
同じ日本人でも、その継承を受けていない人がいたら、その人はやはりのれんを「くぐる」ということはないわけで、人種にかかわらず、彼らやはり脱衣所に突入してくる人になるだろう。

外国人がつぎつぎに、脱衣所に突入してきて、着衣のまま露天風呂へ踏み入つてゆき、「へえ、これがオープニングア・バスか！」

みたいなことをきつと言い、数秒見物して、満足してドタバタと退出していく。

そんなんが次々にやつてきて、つぎつぎに出ていく。
わたしは人種差別をしているのではない。

日本人がヨソの国に行つたときも、同じようなことをやらかしている蓋然性があるだろう。

かつて、日本人がエコノミック・アニマルと言われて蔑視されていたころ、それでもホステスのお姉ちゃんとカーディーラーのおじさんはフランスを旅行し、よくわからないルーブル美術館をうろうろしていただろう。そのとき、われわれ日本人が、当地にあつた風情を台無しにしたということはきつとあつたはずだ。

中国人が、日本の温泉地の風情を体現はできないよう、われわれ日本人がセーヌ川のほとりに佇んだとしても、そこにヨーロピアンな何かを現わすことはできない。

荒川の土手で盆踊りが開催されているというなら、われわれはその風情がわかるのだが、セーヌ川でどうこうというのは、あこがれのイメージでしかなく、われわれの継承した文化ではないので、その体現ができない。ただ、一方でこうも思うのだ。

ごくまれに、たいてい白人で、たいてい一人で来ている様子の外国人が、肩まで温泉に浸かりながら、頭まで真っ赤つかに染まっているという

ことがある。
(えつ?)

何をどうやつたのか。温泉、露天風呂にあるべき風情というものを、彼はひとり全身で体現しているのだ。
わたしはおどろかされてしまう。

「すげえな、お前、なんか開眼しているなあ」

しみじみ感心させられてしまう。

そんなんことってあるのだろうか（じつさいあつたのだけれど）。
わたしは男性なので、男湯のことしかわからず、わたしが目撃するのはいつも男性だ（当たり前だ）。

頭にタオルを乗せて、肩まで浸かり、顔を真っ赤にして、その表情がハジー・ヨイヨイになっている。

彼がたとえドイツ人であつたとしても、その口元からは、このとき日本の民謡でも流れ出てきそうなのだ。

それを見ていると、ローレライの歌詞なんかぜつたい忘れているだろ、としか見えない。

「コイツはひよつとしたら、のれんを『くぐる』のかもしれない」とも思われる。

「くあ 生き返るねエ」

と日本語で話しかけたら、そのまま伝わるんじゃないか、と思わされる。

すごい。

ゲルマン人のくせに、なぜ温泉でそこまで「出来上がる」のか。

わたしはそういう人は、ある種の「才能」があるのだと思う。

その土地の文化、その土地の靈、その空の魂というものに、接続できてしまふ奴であり、染まってしまう奴なのだろう。

それを見ていると、わたしはこころの底から、「ああ、懲しんでもらえているようでよかつた」と思う。

わたしは、信じてもらえないかもしないが、内心ではけつこう愛國者

なのだ。

あなたはたしかに、ハコネのユに浸かつたんだよ、グッドデイ、ハブア
グッドトリップ、と内心で思う。

偉そうに……

わたしも才能のある人になりたい。

もうずっとむかし、わたしがインドのガンガー（ガンジス川）のほとり
にいたとき、いろんなインド人が、熱心にインドの神話を教えてくれた。
エモーショナル・フレームというものが引き継がれていて、破壊神と創
造神とブラフマーがいて、ここがどれほど聖なる場所なのかということ
を、二時間ぐらいかけて立ち話で教えてもらつた。

いつのまにか夜になつていた。

マニカルニカ・ガートといつて、葬式をしている焼き場があり、そこを
見物していると観光客はたいてい、
「見世物じゃないんだ！」

と手を振つて追い払われ、怒られがちなのだが、わたしはなぜか、その
茶毬の煙にいぶされながら、
「父は、マリファナのやりすぎで早死にしてしまつた」
という話を聞かされた。

喪主らしき若い兄ちゃんだった。
彼は目に涙を溜めていたので、わたしはなるべくそれを見ないようにし
た。

マリファナのやりすぎか、それは残念だった、とわたしは言い、わたし
は何とも言えず、悲しいか、とだけ彼に訊いた。

彼は首を振つて、

「悲しんではいけない。悲しんだり泣いたりすると、魂があの世に行けな
くなるから」

と、平静を努めて言つた。

わたしは無力にうなづいて返すしかできなかつたが。

わたしはいちおう、そうした彼に出会い、同時に、すでに死んでいる彼
の父にも、そのとき会つたように思う。

そうしたものを、風情と呼ぶのはさすがにはばかられるが、どうかわた
しもそういうとき、才能のある奴でありたいと望む。
何かが出来るというような、たいそうな才能は要らないが、誰ともわ
からない誰かの大切なものを、なぜか台無しにはしないという、そういう才
能を持ちたい。

カミサマがいまこれを読んでいたら、即刻、引き続き、濃厚に、おれに
その才能をよこすように。それぐらいかまわんだろう。

いま、観光地に行くと、客は本当に外国人ばかりで、多くが中国人だ。
そして、風情は破壊されるのだが、それを見ていて不安になることがあ
る。

それは、インバウンド客を応接している観光地側のスタッフも、しだい
に風情を失つていて見えてるといふことだ。

ただの気のせいだといいのだけれど……

毎日、文化の異なる人たちが来て、スポーツジムに入るような勢いで脱
衣所に突入し、動物園のフラミンゴ池を見物するような目線で露天風呂を
眺められると、日本人の側だつて次第にわけがわからなくなるのかもしれ
ない。

かといつてもちろん、いまさら尊王攘夷運動を始めるわけではない。
かけがえのないものを得て、かけがえのないものを失う、それはただの
トレードだ。

ただ、わたしは才能が欲しい。

才能がない奴が、けつきよく風情をなくすのだと思う。だから、わたし
は才能が欲しい。

「風情がないのは才能がないからだ」

十五年

つぶやきの

病

どを潤している。食事はどうしているのかと訊くと、走り回る齧歯目たちの死骸がしばしば出るそうで、ルーデイいわくそれは「食える」ものだそうだ。ルーデイの行状はすでに狂人のそれと思われたが、フェンス越しに対話してみると、意外にそこまで精神が荒廃しているという印象を受けない。

「ルーデイ、自我に穴があいたというけれど、それはきみだけではなく、この時代に生きる者なら全員が同じことじゃないか？ 何もきみだけそうして暗がりに隠遁していることはない。また、きみだけそうしてうずくまつていても、そのことはきみを救済しないだろう」

それはそうだろう、とルーデイは言った。

ルーデイはフェンスのそばまでにじりよってきて、
「もういちど説明を聞かせててくれ。合理的な説明をだ。きのう話してくれた、あの説明でかまわない。あれをもういちど、聞かせててくれ」

カリファ学校はすでに廃校になっている。自治体が管理する敷地内はいつもお立ち入り禁止になつてゐるが、警備員が配されているわけでもなく、廃校カリファは放置されたままだ。

カリファの敷地内にあるいくつかの構造物に、物珍しいものは何もなく、覆いもなくむき出しになつてゐるかつての水泳場の基礎部分、そこにいくつかの動物が棲みついているらしい。コンクリートで形成された暗い構造脚部はぐるりをフェンスで囲われているものの、小さな動物たちならその隙間を低く潜れるというわけ。

その暗がりに生活する齧歯目の動物たちに混ざり、中肉中背のルーデイが棲みついている。彼の着ている衣服はすでにかつての色彩を失い、暗がりに溶け込んでほとんど無彩色のものに見える。

ルーデイは、

「自我に穴があいた」

と言い、そのフェンス防壁から出てこない。そうしてかれこれ数か月が経つた。どのようにしてフェンス内部に入り込んだのかは、ルーデイ自身思い出せないという。

配管から微弱な水漏れがあり、ルーデイはそれを手ですくつて飲み、の

「そのとおりだ。よく覚えているなルーデイ、はじまりはただそれだけのことだった」

上空を冷たい風が通り過ぎ、生徒たちのいなくなつたカリファ中庭の、カエデの木から枯葉をもぎとつていった。

「われわれはきみの漏らした、そのつぶやきということに惹かれ、その面白に興じていつたのだつた。当たり前だがルーディ、ウーソーを捨てればリヤンメン待ちでテンパイになるということは、外部に漏らしてはいけないことだよ？ それは本来、きみの自我の内部に留めておかねばならない想念だつた」

「ルーディはうなずきつつ、しかし、
それはもう不可能になつたろう」

それについてはこちらも頷いて返すしかない。

「ルーディ、本来は、自我のうちに留めておかねばならないことを、つい口先から漏らしてしまうということがある。そのことは、かつてつぶやきと言われ、厳密にはきつと失言に分類されるものだつた」

これはきのうの説明にはなかつたことだが、と注釈し、

「きみがウーソーを捨ててリヤンメン待ちをテンパイする、と漏らしたことにについて、あのときじつは、わわれれの側もつぶやきを漏らし返してもよかつたんだ。ただ当時、わわれれにはそこまで発達はしていなかつたら……つまり、こいつ自分の手の内をつぶやいて漏らしていやがるよ、といふつぶやきを、即座にわわれれの側から漏らして返すという手もあつたのさ。でも当時は、そこまでわわれれの自我に穴があいていたわけではなかつたので、そこまでの発想は湧いてこなかつた」

このときルーディの目は、透明度を失つて濁つており、いま話されていることの肝腎なところまでは聞き取れないという様子だつた。

やれやれ、という思いがして、

「ルーディ、もはや思い出すことさえできないことだが、当時のわわれれは、つぶやきを無言のうちに漏らすということもなければ、内心のものを無音で空気に漏らすというようなこともなかつたのさ。とうぜんだ、當時われわれはまた、つぶやくという機構を持つていなかつたんだから」

「十五年前はそうだつた。しかし、それは何年前というより、いまはまったく違う場所の話を聞こえる。おれたちはいつのまにか、まったく違う場所に来てしまつたのか。たかが、つぶやくということの遊びで」

「そうかもしない。たかが遊びと言うけれど、それはこの十五年間、あきらかにわれわれの文化だつたじゃないか」

文化によつてわれわれの体質は決定づけられるということは大いにあります。どうのじゃないか？ そのように問うても、ルーディからの返答はなかつた。

「われわれは、つぶやくことの本質も忘れて、それに興じて、そのことに遊びつくした。大いに笑つたね、それもまた事実だ。かつては内部から漏れようがなかつたものを、あえて全面から放送出するようになつた。それが面白かったんだよ。その遊興は、やがてわれわれの体質になつて、いつのまにか、もうそのつぶやきを内部に留めておくということじたいができなくなつた。たとえ口に出さないようにしていてもね。全身から、無言のそれは噴き出るんだよ。漏れている、漏れている。それがまた、おかしくてしようがなかつた」

「おれにはそのいちいちが刺さつていたのさ」

「そのいちいちが刺さつていただつて？ ルーディ、それは誰だつて同じだ。よく考えてみろ、われわれは内部のものを内部に留めておけなくなつたわけだろう。それはダムで言えば、堤（つつみ）に穴があいたというようなことだ。その穴は拡大してゆき、やがて湖底にまで達し、貯水のいっさいは不可能になつていく。そしてついには、堤というその存在さえなくなるだろう。このときどうなる？ 堤も水門も失われて、出入りは自由。その跡地には、ひょっこり野鹿の親子でも入り込むだろう。ハハ内部のものが流出するということは、外部のものが流入するということでもあるVV」話されていることを、まるで聞き取りたいのか、コンクリート脚の影から、二匹の齧歯目がこちらを覗き込んでいた。

すべてのことはおれに刺さり、おれに入り込んだ！ ルーディはとつじよ強い声で言った。

「隣国の中、そのまた隣国の中、名前の字面さえ読めない誰かが、あたらしく建造する自分の家を、手焼きのレンガ造りにすると言つている。それはそうなのだろう、炉でレンガを焼く工程まで見せてもらつたのだから。彼らはきっとそうするだろう。そうしてまるで、手焼きのレンガで家を建て、

その中に住むということは、まるでおれのことのようになつた」

内部のものが流出するということは、外部のものが流入するということでもあるのか。

「ドルモント山荘は、小さいけれど設備の良い山荘で、しかも利用料が安いからとも人気がある施設だ。それにお世話になつてゐるという人はたくさんいる一方で、ドルモント山荘の主人は、女性のひとり客には執拗すぎるアプローチをしてくるんだ。気をつけなくちゃいけないな！」それで一度、本当に怖い思いをしましたって人もいるんだ」

「ルーディ、もともとはただのつぶやきだった。たかがウーソーを切つてリヤンメン待ちでテンパイするということの漏出、つい口先から出てしまつたこと、ただそれだけだった。つぶやき。それが、きのうも説明したとおり、たまたま電腦通信端末の機能性とよく合致したのさ。われわれの遊びは、垣根をこえ、世界中に飛び火してゆき、たちまち同時代全員の文化になつた。そして十五年ものあいだ、それを加速して遊ぶことに誰ひとり躊躇しなかつた。きのう説明したとおりだ」

ルーディは首を横に振り、なおも強い声で続ける。

「アジンバラ蚊に刺された者は、それで病気になるわけではないけれど、無氣力なくず人間になるらしいよ。ちょうどおれみたいに。だからおれはアジンバラに分類される。たとえその蚊に刺されたわけではなかつたとしても、分類上はアジンバラになるんだ。そしておれのようなアジンバラは、トールスタン・タイプと相性が悪いから、たとえば職場でトールスタンと出くわすと、すぐに逃げ出して退職してしまうんだよ」

「なんだい、そのトールスタンというのは」

「知らないよ！」

ただおれは、どうしようもなくアジンバラなのさ、たっぷりとな、トルーディは吐き捨てて言つた。

ルーディの話は多岐にわたつた。

「コディニ・ソースの作り方を知つてゐるか。多くの人は、コディニチーズを白ワインとコンソメで煮て溶かすと思つてゐるようだけれど、じつはそうではないんだ。コディニ・ソースを作るのに本当は酒やコンソメは要

らないのさ。コディニチーズを水で煮て、そのときマセトンという薬草と一緒に入れる。マセトンでコクを出すのが本格なのさ。あるいは地域によつては、マセトンじゃなく櫃花草の根を入れることもある。どうだこれがおれさ。これがおれなのか？　おれはコディニ・ソースを作つたことがないからともかく、口にしたことさえないっていうのに」

ルーディは、フェリエ競技チームの現監督、シートフィールド教授の指導方針については大いに批判的であるそう。彼の選手に対する叱咤はあるく、それどころか、口にしたことさえないっていうのに」

ルーディは、シートフィールド教授は、公正な実力主義で選手を選抜する旨を公言している反面、内部では恣意的なえこひいきがある。公開共有される評価シートのスコアにもとづいて選抜されるというのは事実だが、そのシートへのスコアリングじたいにえこひいきがあり、その実態にもう清潔感はない。いまやこうしたことのすべてについて、競技じたいに真剣な選手たちこそ、猛反発を示しだしている。

シートフィールド教授には、たしかに過去、別チームを準優勝まで導いたという実績があつたが、その実績もいま振り返れば、単にすぐれた選手を擁していたからであつて、特段に監督の指導に功績があつたとは言えない。

「だからもう、本大会の始まる前、シートフィールド監督は終わりだと思うけどね。どうだ、これがおれさ。これがおれなのか？　へへなぜおれはこんなことに確信があるんだ？」「

ルーディの語りかけは切迫しており、また説得力も伴つていた。ルーディの言いようとその様相には同情を寄せるしかない。きっとルーディの言つていることは正しいのだろう。

「ルーディ、この十五年のうちに蓄積したものを、一夜で代謝することはできないさ。きみはつぶやきを漏らしたのだった。きみは流出をしたぶん、その穴から、何万倍もの流入を受けた。きみはただ、ウーソー切りのリヤンメン待ちを漏らしただけなのにな。それでも、その流出穴は広げられだし、その穴の拡張は大いに、電腦通信のテクノロジーが担つた」

どさりと音を立て、ルーディは地面に倒れ込んだ。胎児のようにうずく

まり、嗚咽を漏らしはじめる。

「なぜおれはこんなことに確信があるんだ？ 何ら、おれが体験してはいるものでないものを、なぜおれはこうも絶対に確信しているんだ」

「ルーディ、きみが体験していないものなら、きみに与えられているものは、ただの錯覚なのかもしれないよ」

錯覚、という語を使うと、とつじょ地面がたわみだした。それこそ錯覚かもしれないが、地面はきゅうに緩いすりばち状になつてゆき、そこに立たされるのはじつに不安定になつた。

錯覚。

ルーディ、ルーディ。そんなにうづくまつていらないで、さあ。電腦通信とその端末は、われわれに錯覚を流入させる装置に違いない。もともとはわれわれ自身が時いた種とはいえ、きみはそれによつてずいぶん苦しめられることになつた。それにしても、きみに流入するものが錯覚にすぎないのだとしたら、それはそこまで恐れるほどのものではないのじゃないか？ 錯覚が流入する、いやきっと正確には、外部のものが内部に入流して、それが自分内部のものだと錯覚されるということだろう。それにしても、それはけつぎよく錯覚にすぎないんだ。

引き続ぎうずくまつたままのルーディから、声が発される。

その音色はまるで、人知れぬ排水溝から響いてくるかのようだつた。

「ソーウージャーナーイー」

思わずあとずさりさせられるが、すりばち状にたわんだ地面は不安定でよろける。

うずくまつたルーディの口調はずいぶん間延びしている。

なぜこんなことに確信があるんだー。おれは、数か月前、ここに入り込んだときから、電腦通信端末を持ち込んでいない。それで、どこかの誰かがレンガを手焼きして家を建てるとか ドルモント山荘の主人は性的に危険とか、おれは救いがたいアジンバラでトールスタンにはやられるだけとか、コディニ・ソースはマセトンこそ本格とか、シートフィールド教授は指導者には堪えないとか、そういつたことが、電腦通信端末から得た情報なのか、そうでないのか、おれにはもうわからないんだ。いやきっと

と、おれは、電腦通信端末からそんな情報を得てはいない。にもかかわらず、おれはそうした情報を確信を持っている。まるでその情報こそがおれ自身であるかのように、おれは絶対の確信を持つている。ひと眠りして、起きたときは確信を持つている。気を抜いて、齧歯目どもが走り回るのを眺めていると、ふと、やはりいつのまにかおれは確信を持つている。どちら入り込んだかわからない情報について、まるでそれこそがおれ自身であるかのように、おれは確信を持つている。

ルーディはのつそりと起き上がり、

「なあ、この情報はどこから入つてくるんだ」

と言つた。

「電腦通信端末を持ち込んではいないのか」

「持ち込んでいない。だいいち、こんなところに数か月もいて、バッテリ

ーがもつわけないだろう」

電腦通信端末がなくとも、外部の情報が入り込んでくる。

いや、それは錯覚だ。錯覚にすぎないはずだ。

外部のものが、自我の穴から流入し、自我の内部に入り込むことで、それはまるで自分のことのようだ。

ルーディ、錯覚だ。ただそれだけのことのはずだらう。

「お前はいま、外部のものが流入してきて、それが自分のことになると言つた」

ルーディはいつそ、余裕さえ見せ始めている。

「お前はそれを錯覚と言ひ張るけれど、それはつまり、へへ錯覚こそが自分VVVということじやないか？」

それとも、とルーディは言つた。

「それとも、お前は、ひとつひとつのこととを体験してきたといつのか」

隣国に隣国で誰かが、レンガを手焼きして家を建てるというようなことを、お前はへへ体験VVVしてきたのか。

そうルーディは詰問してくる。

ルーディ、お前の言いたいことはわかる。しかし、落ち着いて考えなおせ。

「お前こそ考えなおせ。おれたちはこの十五年間、つぶやくという文化を進んできた。つぶやきを流出させ、つぶやきが流入してきた。毎日がそれだつた。それで毎日が大騒動だ。なにひとつ体験はしていないのにな！」

そうして十五年間、おれたちは、錯覚を得づけてきて、体験のすべて捨ててきたんだ。その中でおれたちが発見したのは何だつたか？ おれたちが発見したのは、錯覚こそ自分だつたということだ。錯覚がおれで、錯覚がお前だ。誰だつて自分ということだけは確信がある。デカルトが言ったように、自分だけが確信だ。そして自分とは錯覚のことだ。錯覚だけが確信なんだ」

おれたちは確信を持ったときにつぶやくだろう。おれは、ウーソーを切つてリヤンメン待ちにするか、それともドラの受けを残すべきか、確信が持てなかつた。麻雀牌を引いて、捨てて……そんな体験に確信は持てないからな。だからおれはつぶやいた。ウーソーを切つてリヤンメン待ちにしよう。つぶやきは錯覚され、錯覚はおれになり、錯覚は確信された。

自我に穴があいて、これはもう元には戻らない。すべての体験は失われ、そのかわり無制限の錯覚を手に入れたのだ。それは無制限の自分だ。このことは、電腦通信端末を捨てたところで変わりやしなかつた。

「錯覚が自分だ。穴があいたという言い方を、より正確に言い直そう。それは門が開いたのだ。錯覚の門さ。錯覚の門が開き、その門は自分へとつながっている。その錯覚の門を通つて、流入するすべてのものは錯覚となり、流出するすべてのものはつぶやきとなる。ハハハ、お前らはどうせ、ウーソーを捨てずドラの受けを残せばよかつたのにと思つていたんだろう？ そのお前らのつぶやきはおれの内部に届いている。いまや電腦通信端末がなくても、すべてのことはおれの内部に届いている。おれにはその確信があるのだ。錯覚だなんて言い張つて、その錯覚こそが自分だという真実から目を背けるな。誰も、自分ということ以上の確信を持つことはできない」

「ルーディ、きみの主張は真新しく、聞くべきものを含んでいるが、もう日が暮れてきたのだ。すべてのことはあしたにしよう。わたしも少しめまいがして、まるで地面がすりばちのようにたわんで感じられる」

そのように約束したものの、どうしても翌日からルーディのところに行く気にはなれず、そのうちにいくつかの季節が過ぎた。

ルーディのことをすっかり忘れたころ、人づてに、廃校カリファが解体され敷地は更地に戻されたという報せを聞いた。

その後のルーディがどうなつたのかは杳として知れない。

ただ、あのときルーディの主張したことが、いまもぼんやりと記憶に残つている。

十五年間、たしかに自分たちはつぶやき文化の中を進んできた。

そしてルーディは、錯覚こそが自分だと言つていた。

錯覚の門が開き、すべての体験を失つた、とも。

錯覚が自分だからこそ、錯覚にこそ確信が得られる。

まるで自分のことのよう……

ルーディはそう言つていた。

いまさら電腦通信端末を退けたところで、このことはもう変わらないのだろう。

Tweet▽：われわれはこの十五年、たしかに「つぶやき文化」の中を生きてきただろう。自我内部のものが漏れ出して、そのぶん外部のものが自我内部に流入する。穴があいているから、流出もするし流入もするといふこと。それでふと気づくと、自分が体験したわけでもないことが、まるで自分が開いたのだ。錯覚の門さ。錯覚の門が開き、その門は自分へとつながっている。その錯覚の門を通つて、流入するすべてのものは錯覚となり、流出するすべてのものはつぶやきとなる。ハハハ、お前らはどうせ、ウーソーを捨てずドラの受けを残せばよかつたのにと思つていたんだろう？ そのお前らのつぶやきはおれの内部に届いている。いまや電腦通信端末がなくても、すべてのことはおれの内部に届いている。おれにはその確信があるのだ。錯覚だなんて言い張つて、その錯覚こそが自分だという真実から目を背けるな。誰も、自分ということ以上の確信を持つことはできない」

そうつぶやきのプラットフォームに投稿すると、フウ、と思わず嘆息が出た。

数分すると、レスポンスがついたらしく、効果音が鳴つて、

Resolv.: な? 言つたとおり、お前は確信を持ったときつぶやいただろう? どうしてお前は、こうやつて自分内部に留めるべきことを、わざわざ漏出してしまったのか。答えよう、錯覚こそが自分だからだ。お前はきょうもこうやつて、体験はせず錯覚をしている。体験はせず確信のみをしている。きょうもお前は錯覚の門を開いている。錯覚こそがお前だからだ。お前はずつとこのことだけを続けていくだろう。

ただ、むかしのこと、あのときのマージャンでおれは負けてしまったけれど、あのときのマージャンは本当に楽しかったよ。そういえば、ずっと言い忘れていたことがあった。あのときたしかにおれは、ウーソーを捨ててまたぎスジでリーチを掛けた。たしか待ちはサブローソーだったよ。

でもあのとき、よくよく見ると、おれの手はノーテンだった。マンズがメンツになつていなくて、早とちりで要するにチヨンボだつたんだな。そのあと放銃して、三千九百点で済んで助かつたと思つてゐる。あのときに戻つて言うなら、あのときに限つては間違ひなく、それがおれだったよ。

〔十五年つぶやきの病〕

呼ばれる人たちは "ボカラP"と 聴いてきたのだろう

"どんな音楽を

仄聞すると、ボカラPは死ぬものらしい。
なんだそのデタラメな話は。

わたしもよく知らないが、ボカラPと呼ばれる人たちには、何かしらの理由で早逝してしまう人が多いらしいのだ。
このことは、詳しく知つてゐる人にとっては、「ああ、あれとか、あれのことね」と察せられることだと思うので、いちいち説明はしない。
このことは、詳しく述べることなど思つては、知つてもしようがないことだし、説明されてもわからないことだらうから、説明はしない。
そういう横着なことを考へてゐる。

何かを馬鹿にして言つてゐるのではない。単に本当に、わたしも詳しく述べることなど思つては、知つてもしようがないことだらうから、説明はしないのだ。

現代の若手のポップスシンガーは、「歌い手」と言えればよいのだろうか、一時期の「ニコニコ動画」から大きな影響を受けてゐるのだろう。

現代の若いポップスをYoutubeで観ると、MVは物憂げなアニメ絵で展開してゆき、歌詞が「ちりぢり」に表示されたりして、「ああ、いつかの、ニコニコ動画の続きだなあ」という感じがする。

彼らはきっと、古巣というか、出自がニコニコ動画なのだろう。

あるいは、出自がニコニコ動画というのは言い過ぎだとして、出自はつまり「ボカラ」なのだと思う。

そのことには何の不思議もないし、何の違和感もない。

十五年前、ボカラブームはものすごい勢いであったのだから、それを出自とする歌い手が現代を席巻するのは当たり前だ。

ただここで、わたしにとつさっぱりわからぬことがある。

ところでさつきから、じつにどうでもいい話ばかりしているが、もともとエッセイとはこういうものなので、こういう感じでいいのだ。

たいてして目を瞠（みは）るような話は出てこない。

エッセイなんてそんなもんじやないか……

エッセイなんてそんなものだが、中でも遠藤周作のエッセイは、小説と落差がありすぎて度肝を抜かれる。

小説の重苦しさに比べて、なんだこのエッセイのやる気のなさは。「コイツいくらなんでも書く気なさすぎだろ」

という怒りさえ湧いてくる。

なので、けつこう面白いので、もし機会があれば手に取つてどうぞお試しあれ。

あまりにも脱力しきで、おれは最後まで読めなかつた。

かといつて小説のほうも、内容がヘヴィすぎて、最後まで読むのはたいへんなんだよなあ。

どちらにしても極端な奴だ。

（かならず、「沈黙」は「侍」よりも先に読んでください。これを逆転させると大変受け取りづらくなるので）

話をボカラPに戻す。

現代の若い歌い手が、ニコニコ動画やボカラブームを出自にしているというのはわかる。

ただ、そのボカラブームの仕手側になつたはずの、ボカラPと呼ばれる人たち、彼らが音楽的にどのような出自なのかが、さっぱりわからないのだ。

誰か詳しい人がいたらマジで教えてくれ。

たとえば、桑田佳祐さんの出自は、ボブディランや小林旭、そしてビートルズだ。

あの世代でビートルズの影響を受けていないロックシンガーなんていないだろう。ミスター・チルドレンやスピッツだって、ビートルズは聴いてきているはず。あるいは、B'z の稻葉さんは、どういう出自なのか、わたしはまったく知らないけれど、たとえばディープ・パープルやボン・ジョヴィなどのハードロックを聴けば、「詳しく知らないけれど、こういうのが出自でしょ」と思える。

細川たかしさんは演歌歌手だが、出自はあきらかに民謡だ。

美輪明宏さんは物々しいパフォーマーだが、出自はシャンソンだろう。

和田アキ子さんはジャズやソウルが出自だと思われる。

それぞれのミュージシャンの出自なんて、その筋のマニアでなければ知らないだろうけど、それでもふつう、出自がまったく「見当もつかない」なんてことはない。

ロックンロールの出自は、その土台にカントリーミュージックがあつたのだろうし、ソウル音楽の出自は、その土台に黒人靈歌とかがあつたのじやないかと思える。

その中で、唯一、「ボカラ」だけ出自がわからない。

もちろん、ボカラといって、つまり初音ミクをイメージしているのだけれども、これは擬人化されたシンセサイザーでしかないのだから、シンセサイザーそのものに出自を問うていてはいけない。

初音ミクの声じたいの出自を問うのであれば、出自はヤマハ（株）ということになつてしまふ。

このわけのわからない話をわかつてもらえるだろうか。

わたしは、あらゆるクリエイターというのは、クリエーションに先立つ「体験」があるだろう、ということを言つてゐるのだ。

つまり、先に音楽体験がなければ、人はそもそも音楽家にならないだろう、という当たり前の話をしている。

仮に、若かりしころの桑田佳祐さんが、洋楽として輸入されてきたビートルズやボブディランを聴いて、それに惚れて、その音楽体験からミュージシャンになっていくということは、あつて当たり前だろうということ。

あなたは何の体験もなく、いきなり、

「エジプトうなぎ音頭の叙事詩を人形浄瑠璃で上演したい」

なんて言い出さないだろう。

基点となる体験があるはずなのだ。

それが、現代の若いポップスの歌い手の場合、きっとボカロだったんだろうなあと推察している。

一方で、ボカラブームの仕手側になつたはずの、ボカラPと呼ばれる人たち、彼らの基点となる音楽体験がわからないのだ。

このことは、本当にわたしを、奇妙な感触で混乱させる。

ボカラPと呼ばれる人々は、どんな音楽を聴いてきたんだろう？

初音ミクは、擬人化されたシンセサイザーで、それも「すごい硬度で擬人化された」シンセサイザーだった。

でもいちおうシンセサイザーだから、系統としてはいわゆる「打ち込み」になるのだろうか。

かといって、ボカラPの作り出すサウンドから、YMOなどの懐かしいテクノの響きを聞き取るわけではない。

ディスコのズンドコしたものが聞こえてくるわけでもない。

トランスとかドラムンベースとかはありうるのかもしれないが、そっち方面の人たちなら、少なからずハウスとか、ヒップホップとか、レゲエとか、そういうものの影響も受けているはずだが、そういったものの気配はまったく感じない。

まさか、陽キャの極みのような、アホみたいなユーロビートで育つたとも思えない。

シティポップとともに世代が違うのだろうし、シンセサイザーといつて、まさか「そして僕は途方に暮れる」からボカラPになつていつたとも思えぬ。

ナゾだ。

わたしはボカラPの実態なんて、一ミリも知らないのだが、少なくとも一般に与えられているイメージとしては、彼らは、「作曲家として色々サウンドクリエーションしてきましたが、今回の新作は、ボーカロイドに挑戦してみました」という感じではないと思うのだ。

ボカラPは、作曲家が初音ミクというシンセサイザーを使い始めたといふことではなく、ほとんど初音ミクのリリースと同時に発生してきている

ように思える。

それで、ボカラPの出自がわからない、と感じる。

出自にこだわりたいわけではなく、ボカラPと呼ばれる人たちの、基点となる音楽体験について知りたいのだ。

若手シンガーがボカラの音楽体験を基点しているのはわかるのに、そこから遡って、ボカラPの音楽体験は不明というのは、どうにもモヤモヤする。

正直に言うと、ボカラPたちの出自は、アニメアイドルです、というふうに見えるのだ。あるいはそのように聞こえる。

もちろん、たぶん、そんなことはないのだろう。

そんなはずはないよな、とわたしは思っている。

さすがに、プロレベルで通用するサウンドを創り出すためには、基点となる音楽体験が必要なはずだ。

たぶんそうだよね？

わたしが何にこだわっているか、わかつてもらえるだろうか。

現代の中高生は、YOASOBIとか米津玄師とか、「ボカラ以後」のミュージシャンを聴いているのだ。

そしてたとえばYOASOBIは、自殺をささやきかける歌を唄い、その歌が2.7億回も再生されているのだ。

これらボカラ以後のミュージシャンたちが、ひょっとすると、ハマ音楽の歴史的系譜には接続せず発生しているかもしれないvvv、と言つてはいる。

ああ、ボカラロPはいつたい「何を聴いて育ってきた」んだよ。

そもそも「ボカラロP」という特殊な呼称にあらためて注目する必要がある。

ショパンがピアノ曲を作ったからといって、ショパンのことを「ピアノP」とは言わない。

山田耕筰のことを「童謡P」とも言わないし、久石譲さんのことを「ジブリ音楽P」とも言わない。

初音ミクは、高硬度に擬人化されたシンセサイザーだった。そのシンセサイザーが主旋律を奏でる——唄う——楽曲を作成し、その演奏を音源化し、人々に届けてヒットさせるということには、へへあたかもvvv、初音ミクという少女をアイドルシンガーとしてプロデュースしていくというような錯覚があつたはずだ。そしてその仕手側にはとうぜん、アイドルシンガーを羽ばたかせていくプロデューサーのような「心地」が強く得られたに違いない。もちろんその心地は錯覚であつて、じつさいにはそこに少女はおらず一台のシンセサイザー・アブリがあつただけにすぎないにせよ、当時のボカラロPにおいて人々はこの錯覚におおいに遊び、この趣味においに興じたはずだ。

それゆえに彼らはボカラロPと呼ばれる。そのことはすごくわかる。が、そのぶん、彼らの音楽的出自がわからないのだ。

初音ミクより遡って、彼らの基点となる音楽体験がわからない。

まるで、アニメアイドルのプロデューサー、その「心地」じたいが、彼らの出自、彼らの基点になっているように感じられてしまう。

かといって、さすがにアニメアイドルにぞつこんというだけでは、音楽なんて作曲できるわけがないので、音楽制作にかかわってはプロとしての知識や技術を持っているのだとは思うが……

ただそれでいうと、こんにちでは、作曲というのは生成AIでもけつこうなレベルで出来てしまう。

表面的な知識や詳しさ、技巧についてとやかく言っているわけではもちろんなく、単純な、眞の意味において、基点になつている音楽体験は何だったのか、ということが気になつてゐるのだ。

まさかのまさかで、初音ミクというアニメアイドル少女の、存在の錯覚、さらに彼女を羽ばたかせるというプロデューサーの心地の錯覚が、すべての基点になつてゐるという可能性もあるではないか。

もしそういうケースがあつたとしたら、その場合は、彼は音楽体験によらず歌曲を制作し、それをヒットさせたということになる。

であればそれは、これまでの音楽の歴史的系譜には所属していない。

彼の所属する系譜はまったく別のものだ。

古く「二次元」と総称されたもののうち、流行するオタクアニメがあり、その作中にはアニメヒロインがいた。彼女らへの愛好は「2ちゃんねる」などでさんざん言い合われた。また「二次元」と総称されたものは、アニメだけでなくコンピューターグラフィックで表示される、たとえばギャルゲーなどのヒロインも含まれていた。ゲーム方面では、そのヒロインに對して何かしらの操作ができるという、放映アニメとは異なる楽しみの要素も当然あつた。

一方で「三次元」と総称された側では、アイドル文化が隆盛し、三次元のアイドルは唄つたり踊つたりした。また三次元ではアイドルが「プロデュースされる」ということの流行もあつた。アイドルはどうぜんステージに立つものであつて、そのことは当時の「二次元」にはあまり取り入れられていない要素だつた。

この、当時の二次元のヒロインと三次元のアイドルを融合させて、そこに初音ミクの像を結んでいくということは、われわれの想像力にとつて難(かた)くないことだろう。

初音ミクは、じつはあたらしい音楽形態の出現ではなく、あたらしいヒロイン、あたらしいアニメアイドルの出現だつたのではないか?

操作できるアイドル、舞台に立つことができるヒロインだ。

この仮説に立ち、もしボカラロPと呼ばれる人たちが、基点となる音楽体験に拠らず、あたらしいアニメアイドルおよび、そのプロデューサーの心地の錯覚を基点としたのであれば、この方面から発生していつたものは系譜的には音楽・歌曲とは呼べないことになる。

では、そうしたものはいつたいどう呼べばいいのか。

あくまで、ここで唱えている仮説に則った場合という限りになるが、これらのはやはり「つぶやき」と呼ぶしかない。

錯覚を基点として始まっているのだからつぶやきだ。

音楽体験を得ることが出来なかつたとしても、初音ミクに何かを錯覚することは出来たという可能性がある。

単純に考えてみてくれ。

たとえばポールマッカートニーが、ひとりで部屋にいて、おもむろにギターを鳴らし、口から何か音声を出している。

このときポールは唄つているだろう。

まったく同じ状況で、「ボカラロ以後」の誰かがひとりで部屋にいて、おもむろにギターを鳴らし、口から何か音声を出している。

このとき彼は「つぶやいてる」のではないか？

このときポールが何かを「錯覚」しているとはどうてい思えない。

「ボカラロ以後」の誰かは、何かを「錯覚」しているのではないだろうか。

桑田佳祐さんが、ひとりで部屋にいて、あらためてボブディランのレコードを再生したら、やっぱり桑田佳祐さんはあたらめて「音楽体験」をするように思う。

そうしたことは、見ているだけでわかるところがあるじゃないか。

ボカラロPがひとりで部屋にいて、ボブディランのレコードを再生したたら、ボカラロPは「音楽体験」をするのだろうか？

そのことがどうしても想像しづらい。

ボカラロPは、レコードの再生を止め、何かアニメ動画を再生し始めるような気がするのだ。

こんなもの、もちろんただの偏見でしかないのでは、その点はどうしようもなくおわびしておく。

的外れだつたらひたすら謝罪するしかないし、仮に的外れではなかつたとしても、こんなものは謝罪申し上げるしかないところだ。

もし、ポールマッカートニーから、ポール自身が唄う歌として作詞作曲を依頼されたら、ボカラロPはどんな曲を作るのだろう。

そのときは、ボカラロPならぬポールPになるわけだが、ポールはアニメ

アイドルではなく、実在のミュージシャンでありシンガーだ。

もし、アニメアイドルへの錯覚を基点にしている場合、ポールに対する作詞作曲にはまともにはたらくことができない。

桑田佳祐さんが、部屋でひとり、アコースティック・ギターを布切れで拭くということをしていたら、そのとき彼の全身からつぶやきがムワツと出ているということはないだろう。

ボカラロPと呼ばれる人たちが、どんな人たちなのか、わたしは本当に知らないのだが、アコースティック・ギターを布切れで拭いているあいだも、その全身からつぶやきがムワツと出ているという人はいるだろう。わたしは意地悪を言つているわけではない。

あなたが十五年間ずっと抱えてきた違和感を暴露しようとしているのだ。

あなたの場合はどうだろう。

あなたは、部屋でひとり、ボブディランのレコードを再生したとして、本当に「音楽体験」をするのだろうか。

そのことは、とてもあやしいものだと思う。

意地悪を言つているのではないし、あなたを苦しめようとしているのでもない。

あなたはそのことで苦しんできたのではないか、と言つているのだ。

わたしの知る限り、とても単純なこととして、一枚のレコードを聴くとき、それを純粹な体験とできる人はそんなに多くない。

むつかしいのだ。

そんな、音楽体験なんてね。

ふつう、体内で何かの錯覚が慣れ、全身から不明のつぶやきがムワツと出てくる。

あなたがそのいちいちを、ツイッター（X）に投稿するかどうかは別としてだ。

ともあれ、勝手に仮説を立てて述べたが、これは本当に仮説でしかなく、わたしの疑問、わたしにとつてのナゾは初めから変わらず残されている。

ボカロPと呼ばれる人たちはどんな音楽を聴いてきたのだろう。
誰か詳しい人がいたらマジで教えてほしい。

「ボカロPと呼ばれる人たちはどんな音楽を聴いてきたのだろう」

ABトンネルは、A地点を入口にし、B地点を出口にしている。
つまり、Aから入り、進んでいくと、やがてBから出るのだ。

AはトンネルでBとつながっている。

うわあ、当たり前だな……

もちろんBから入って進んでゆけば、こんどはAから出てくる。
トンネルだ。

世界中でこれほど無駄な描写もあるまい。

トンネルは長く、曲がりくねつているので、A地点から出口のB地点は見えない。

それでも、AはトンネルでBとつながっているのだが、「つながっている
なあ」と観測できる必要はあるだろうか。

観測しなくとも、Aから入ったものはBに出てくるだろう。

犬でも猫でも、オニヤンマでも、Aから入ったものはBに出てくる。

つながっているからだ。

AからBにつながっているというのは、ただのトンネルの「性質」であつて、そのことに気合は要らないし、観測も必要ない。

「つながっていたのだ！」

と興奮して噴い出す必要もない。

「オレは……A地点からトンネルに入り、B地点に、到達するんだ……き
つとそうなるよう、みんな祈つていってくれ」

みたいな決めゼリフも必要ない。

トンネルによつてA地点はB地点につながっている。

そのことを、確かめないと、AからBへは行けないだろうか。

そんなことはない。むしろどれだけ拒絕しようとしても、A地点からト
ンネルを進んだ者は、強制的にB地点へと連れて行かれてしまう。

A B トンネル

目を閉じていてもB地点に行くし、マッピングしなくともB地点に行く。

われわれが「行く」のではなく、ただのトンネルの性質だ。

信じる者は救われる、というけれど、信じていても、トンネルはやがてB地点に出る。

この場合、もし信じるというなら、トンネルじたいを信じて、トンネルに入るということになるだろう。

トンネルがB地点につながっている、ということを、アテにしてはいけない。

アテにしなくてもトンネルは出口に到るし、アテにするということは、そもそもを疑っているということだ。

アテにするというのは、「確からしさ」を補強するということに他ならない。

根本的に疑っているから確からしさの補強が必要になるのだ。

何千人、何万人、そして著名人も国家公務員も、トンネルによってAからBにつながっていると発言している。それらの発言を観測することはできる。「じゃあ、たぶん本当なんだろうな、よしAからトンネルに入つてBに行こう」

そのように、確からしさをじゅうぶん補強し、その確からしさを根拠にするとというのが、アテにするということだ。

これだけ確からしいのだから、きっとそうなのだろう。アテにできる。

そういうものに限って、ウソだつたりするんだよなあ。

そのトンネルはじつはC地点につながつていたりする。
あるいは、トンネルが途中で閉塞していたり、トンネルが途中でぐるぐる循環していたりする。
ひでえウソだ。

それがウソだと、彼らは知っていたから、トンネルに入らずに、手前でたむろっていたわけだ。
いまさら狡猾さに気づいて腹が立つが、もう遅い。

A Bトンネルによって、AはBにつながっている。

トンネルに感謝しても出口は変わらない。

ではトンネルに対してもうすればよいか。

トンネルがあるなら利用させてもらうだけだ。

なぜ、AからBにつながっているのかは知らないが、つながつていて、すごい。

すごいということは、それが偉大だということであつて、それ以上のことを、われわれは持ちようがない。

われわれが自動車を運転し、トンネルを走り抜けていくとき、トンネルに向けて、

「がんばれ、がんばれ」と応援したり、対話したりはしない。

いつもどおりの車中を過ごしていればよいのであつて、トンネルがどこかへ通じているというのは、ただのトンネルの「性質」だ。

トンネルに関心がおありで?

そんな気持ち悪い奴はない。

「すごい! あなたは、どうやってそのB地点に立つているの」「すごい」と言われても。ただトンネルが、A地点からB地点へつながつていたようだ

「へ~ そなんなんだ。すごいなあ。わたしも、やってみようかなあ」「やってみる、というのは、へんな言い方ですね」

「やつてみる、という人は、じっさいにはA地点に来ない。

この人は、B地点に行きたいのだから、A地点には来ない。

こういう人はたいてい、B地点に「行く」ということがやりたいのだ。

トンネルを抜けてB地点に到つてしまつては、それは「ただのトンネルじやん」ということしかならない。

それでは、自負も満たされないので、

「わたしは、どこまでもあきらめず、B地点に向けて進んでゆきます。いつか、到達するんです」ということをしたいのだ。

そういう方法もたしかにある。

あるのかもしれない、おれにはわからない。

ただ、おれには無理だ。

おれにはそんな根性はない。

自負を満たしたいという衝動がない。

おれには、みずからで山を越え谷をわたり、B地点へ到るなんていうことが、まるで不可能に思える。

無理だよオ」と思いながら、うろうろしている。

何かないのかな、と思いながら。

そのじつ、

「いや、何かあるだろ」

と直観している。

「早よ、出てこい」

(こんなのもう、請求しているに等しいよなあ)

それで、気がつくと目の前にトンネルがあるので、

「なるほど、これかあ」

と思う。

いまさら若干ビビりはするけれど、

「まあでも、これだわ」

おれはトンネルに入り、進んでいく。

トンネルを進めばただB地点に出る。

おれはトンネルを出て、空を見上げ、ぐあーっと背伸びをし、

「ふう、やれやれ。いけたわ」

と大きな一息をつく。

無事、狙っていたとおり、B地点に来られたわ。

もう慌てることはないので、おれはそのへんの岩に腰掛ける。

そこに、トンネルの主が現れて、

「このトンネルはワシが掘ったんじゃが」

と言う。

おれはそれに対し、

「あっそれは、どうもどうも」

と言う。

自動的に頭が下がる(そりやそうだ)。

すぐえ人だ。

ご自身が踏破するのみならず、後続のアホたちのためにトンネルまで掘つてくれるとは……

これはもうモノが違う。

とはいえ、なぜかわたしがこころから素直に口にするのは、

「いやあ、こんなトンネル掘つておいてくれたら、そりや僕みたいなモン

が勝手に使いますよ。うへつへつへ。いやアほんとすいません、勝手に使

わせてもらいました。助かつたつす」

トンネルの主は、

「うん……まあ、そういう奴のために、掘つたものではあるので、いい

よ」

「うつす。とてつもない広いおこころ、マジでありがとうございます」

「ところで、こんなトンネルに、よく何も考えずに突つ込んだなあ。どこ

につながっているかもわからんのに」

「いやあ、これはもう、B地点に行くでしょ。いや正直、その先がB地点

なのかどうなのはわからなかつたんですけど。そもそもB地点のこと僕は

よく知らないんで……ただ、誰かがわざわざ自分のような奴のために掘つ

てくれたものってのはわかりますから。それじゃあ、これはもうすばらし

いところへ出るぞと。それぐらいはわかりますからね」

「ま、冷静に考えたらそうか」

「そうつすよ。もしこれが、C地点へのいざないというか、そういうワナ

だつたら、もつときらびやかに、B地点への楽々ルートはこちら、みたい

なこと書いてありますよ。もつとそれっぽくするでしょ」

「たしかにな。ワナならそう宣伝するわ。じやあ、そこんところを読み取

れたお前の勝ちつてことか」

「偉そうに言わせてもらうなら、それはそうです。僕はそういう、ホンマモソの人を見抜き、ホンマモソの人に乗つかつて世話になるの得意なん

で

「たしかに、そういう抜け目のない感じというか、ずうずうしい感じ出でるわ」

「出でていますよね」

「何なん、なんでそんなニヤニヤしてんの」

「いやあ、そんなのもう……ねえ。わかるんですよ。あなたみたいな人は、信じがたいことに、アホたちがB地点までたどり着けないということを気にかけてしまいますよ。他人事なのに」

「うるせえよ」

「まるで自分のことみたいに、あるいは自分のこと以上に、ずっと気にかけてくれるんですね。それで、こつそりトンネルまで掘つちやう。このトンネルを掘るのがどれだけ大変だったことか。でも、そんなこと忘れちやつて、このトンネルを自分が掘り抜いたということより、このトンネルを使って誰かが来た、B地点までやつて来られた、ということばっかりよろこんじやうんでしょ」

「そんな、さすがにそこまで肩入れしてねえわ」

「いーえ、あなたはそういう人です。信じがたいですけど、あなたは本当に根つからそういう人ですよ。あるいはいつからか、あなたは本当にそういう人になつちやつたんでしょう」

「ちつ、じやあもうそれでいいよ」

「なので、おころに沿うかと思い、堂々とあつかましく、勝手に使わせてもらいました」

「はいはい、そりや良うござんした。ところできあ、このトンネルつて他にも誰か来るかな?」

「来る人は来るんじゃないですか? 疑りぶかい人はけつきよく来ないでしようけど、まれに能天気な人が、やつぱりホイホイやつてきておかしくないですよ」

「まあ、疑りぶかい奴に来られても困るし、それぐらいでちょうどいいかもな」

「そうつすね」

トンネルによつてA地点はB地点につながつてゐる。

Aから進んだものはBへ到るのだ、それがネズミであつても。

ネズミは感謝なんかしない。感謝なんて高度な精神挙動をネズミに求め

るのは酷だろう。

ただネズミだつて、B地点に到つたとき、何かを感じて、

「チュー、チューーチューウー!」

と跳ねまわりはするかもしない。

そりやネズミだからな。

だからといって、トンネルの主がそのネズミを踏み殺すわけはない。

「おや、ネズミさんも来たわ」

「あ、ホントっすねえ」

「チュー」

案外、ネズミも感謝ぐらゐはするのかもしない。

人間もうかうかしていられないぜ。

あなたはA Bトンネルなんて渡らなくてよろしい。

シャラップ! おれはあなたの行方不明を阻止してゐるのだ。

「自分もトンネルの向こうに行きたいです」

あなたは必死だ。

おれはこう答えよう、

「いや、自分はいかなくていい」

「えーっ、わたしだけ除(の)け者ですか。わたしだけ追放ですか。あー

あ、わたしだけ崖から突き落とされるんですか。えーっ、えーっ」

「うるせえ、アホめ。お前はいつたい何億回そのあやまちを繰り返すんだ」

「だつて」

「うるせえ。自分はトンネルなんか行かなくていいの」

どこかの誰かが言つていたではないか、へへ錯覚こそ自分だ▽▽と。

自分がトンネルを渡れば錯覚だ。

錯覚、つまり、そのトンネルはレプリカだ。

A地点もB地点も模造品で、トンネルが同じサイズで作られていても、

レプリカだ。

そんなレプリカのトンネルをくぐつてどうする。

「わーい、B地点（模造品）だあ～」

ということになる。

まるきりアホじゃないか。

じやあ、何をどうすればいい。

自分がそのトンネルを渡らなければいい。

トンネルによつてAはBまでつながつてゐる。

なんであれ、Aから入つたものはBへ到る。

それはトンネルの性質だ。

それではあなたは、

自分もAから入りたいです」

とと言う。

それについておれは、

「だから、自分というのは錯覚なんだつて」

と答える。

そもそもさ……

なぜ、「自分」がABトンネルをわたらねばならないのか。

「何か」がABトンネルをわたるだけでいいじゃん。

「何か」がトンネルをわたるだけでは何にもならないか。

本当にそうかな？

「自分」が参加していないと世界にはひとつもお祭りがないか。

「自分」が観測していないとホッキョクグマはあくびをしたり眠つたりしないのか。

観測することで、人は「確からしさ」を得る。

観測を重ねることで、「確からしさ」が補強されていく。アテにできる。

そして、十全な観測を得たとき、あなたはついに「確信」を持つ。

錯覚だけが確信だとか、誰かが言つていたつけ。

それにくらべて、観測しないものは「不確か」だ。
では、不確かものは「存在していない」のか。

そうともかぎらない。

むしろ逆に、

「△△不確かなものこそ存在、確信こそ錯覚▽▽

ということもありうる。

あなたは自分の存在を確信している。

デカルトでさえ、「うああああ、我、在りイ、やべ～っす」と確信した。

デカルトは懷疑主義の果てに、確信できることは「我が在る」ということだけ」と結論づけた。

デカルトはバカではない。

ただ、あんまり意味がなかつたというだけだ。

デカルトはバカではないので、デカルトにABトンネルをわたるように促すと、

「いや、このABトンネルは錯覚かもしだれん」

と言い出して立ち止まるだろう。

賢い。

デカルトはおれと話したら頭を抱えて混乱するだろう。

「おれつち、デカルトって言うんだけど。あのさあ、ABトンネルも、錯覚かもしだれんよね」

「そりやそうです。観測はできますけど」

「そう。観測できるけど、その観測が錯覚かもしだれんって、疑えるもんね」

「そうですね。デカルトさんの言うとおりつす。だからおれは、ABトンネルを観測なんてしませんけど」

「観測しないと言つても、そこを歩いたら、どうしても観測しちゃうじやん」

「そうですね。自分が歩けばたしかにそうですよ。でも自分が歩かなきやいijiやないですか」

「自分が歩かなかつたら何がABトンネルを歩くんだよ」

「何かが歩くんでしょうか」

「何か？」

「何かです」

「何か、がABトンネルをわたるのか」

「そうです、何か、がわたるんですよ」

「なんなんだそれ」

「なんなんだと言われても、そりやトンネルですよ。トンネルの性質。A

からBにつながつとるんです」

「何かがトンネルをわたると言われても、そんなの不確かすぎるだろ」

「そうですよ、不確かですよ」

「不確かだと疑えちやうじやん」

「疑えばいいじゃないですか。疑つても、ABトンネルは存在しています

し、その性質が変わるわけでもないんですから、誰も困りませんよ」

「不確かだと、そのトンネルが存在するとは言えないじゃないか」

「何を言つとるんです、あんたさつき、観測は錯覚だつて自分で言つたじ

やないですか」

「あ、そつか。ん？」いや待て、どういうことだよ」

「観測が錯覚なら、未観測が存在でしよう。じゃあABトンネルは『何

か』がわたるつてことでいいじゃないですか」

「未観測が存在？　んん、なんか混乱してきたぞ」

「あなた、自説で混乱しないでくださいよ。あなたは、『我在り』が代名詞

じやないですか」

「そうだけど」

「あなたが言う我在りってのは、つまりこういうことでしよう。観測なん

てものはどこまでも疑わしいものだけれど、その疑わしい観測つてやつを

してしま以上、その『観測手』たる我は存在するつて言つているだけ

やないですか」

「ああ、そうだそうだ。そのとおりだ、思い出した」

「懐疑主義をやつしているおれ、疑い尽くすおれ、そういうのをやつている以上、疑い手である『おれ』だけはどうしても存在しちゃうつてことですよ。で、そういうおれが存在するということを、観測することはできないんでしょ」

「そうなの？」

「そうなの、って、なんであなたが訊くですか。あなたは自分のこと観測

しても、その観測は疑うるつてどうせ脊髄反射で言うじゃないですか」

「なんかもう昔のことだから忘れちゃつたんだよ」

「あなたもいいかげんな人ですねえ。あなたは、我思うゆえに我在りとか

言って、思うという主体の『我』の存在だけは演繹的に証明できる、それ

だけは疑えないとて言つたんじゃないですか」

「あー、なんか、そういうの懐かしいなあ。いま何か、胸にグッとこみあ

げるものがあった」

「そりやけつこうなことで、懷疑主義が懷古主義になっちゃつてますけど

ね」

「おっ、うまいこと言うじやねえか」

「へいへい、じやあ座布団でもくださいな。とにかくあなたが言つたこと

はこうでしよう。全観測は全疑い。だから全錯覚と前提すべしと。そう言

つたわけじゃないですか。その上で、その錯覚をする主体だけは存在する

と言つたわけでしょう。じゃあ、へへ錯覚こそが自分▽Vということで合つ

ているじゃないですか。で、あなたは言つてみれば、どこまでも疑うとい

う方法で、その錯覚つてやつを突っぱねたつてことでしょう」

「なるほど、たしかにそのとおり。何もかも錯覚かもしれないもんなあ、そ

れを突っぱねるつてのは、たしかに疑いつづけるつてことだわ」

「でしょ。そこで、ABトンネルですけど。さつきから言うように、そも

そも自分がわたるわけではなし、ABトンネルじたいも観測しようつても

のではないのに、それをどうやって疑うんですか。観測しないものをどう

やって錯覚するんです。仮に宇宙の端っこでいまチューリップが咲きまし

た」といつて、観測するアテのないそれをどうやって疑うんですか」

「えー、なんかさあ。それだと、そんなチューリップ存在していないじや

ん、つて言いたくなるんだけど」

「そりやそうでしょう。それはあなたが、大前提、存在を観測して確かめようとしているからですよ。宇宙の果てにチューリップが咲くのをじろじろ見て、入念に確かめる、よーし確かめた。それでいて、あなたはなお

『いいや疑いう』つて言うんでしよう。『観測したいが錯覚かもしけんか
らね』つて

「それはたしかに言いそう。いかにもおれっぽい」

「だから矛盾していますね。確からしさを高める行為が観測ですが、そ
の観測という行為じたいが疑いうるつて言うんですから、そりやどこまで
いつても疑いにしかなりません」

「なんか、話がむつかしすぎてアレなんだけど、じゃあ錯覚とはつまり何
なんだろう」

「あなたの知っているとおり、錯覚は疑うことの反対ですよ」

「あれ？ 疑うことの反対は信じるつてことじゃないの？」

「違います。疑うことの反対は確信です」

「確信って……ホラそれって、信じるつて字がついているじゃない」

「他にあてはまる熟語がないので、やむをえず語感で言っています。そも
そも確信つて熟語じたいがヘンなんです」

「熟語がヘン？」

「はい。だつて、確かなものに対しては、信じるなんてことは必要ないじ
やないですか。それこそ、あなたは我在りを言った。疑う余地がないと言
つた。疑う余地がないならこれ以上確かなことはない。で、あなたはその
我在りというのを、わざわざ『信じている』つてわけじゃないでしょ。
そこまで確かにことなら信じるなんて必要はないんですから」

「それはたしかにそうだわ。いちおうおれ、そこんとこ専門だからスゲー
わかる。信じる必要はないわ」

「でしょ。信じるつてのはそもそも不確かなものに向けるもんです。確か
なものに向けてどうしますか。ABトンネルは確かに存在していて、そ
れを不確かなかがわたらんです。そういう話をしている。これを確信す
るもの疑うのも『お門違い』つてものですよ」

「ひえええ、そんな、そもそも確かめる余地がないものを、存在として扱
うなんて、ちょっと感覚的に意味不明だわ」

「あなたねえ、そんなこと言つていてどうします。確かめる余地のないト
ンネルが存在していて、確かめる余地のないあなたも存在していて、その

不確かなあなたがトンネルの世話になつていたらどうするつもりなん
ですか？」

「ひえええ」

「不確かだから扱えないなんてのは論外です、不確かなものしか扱えない
つて言うぐらいになつてくださいよ」

「ひえええ」

ABトンネルによつてA地点からB地点へはつながつてゐる。

それはトンネルの性質だ。

おれはABトンネルの話をしている。

おれは自分の話はしていない。

あなたはABトンネルを確かめたいか。

ふーん そうか。

おれは、確かめなくていいなあ。

【ABトンネル】

性的野心

性的野心の話をしよう。

こうして話をまぜこぜにするのは、文章の書き方として最もヘタクソであり、やつてはならないNG行為だ。

読みにくいたらありやしない。

わたしはいまも作品の中にいて……

根こそぎふざけているのだ。

書物（しょもつ）？

世の中のみんなはもつとシリアルスだ。

おれはふざけている。

向きが逆だ。

おれはずっと昔から、世の中とは向きが逆だったのかもしれない。

ことさら世の中に逆らおうとしていたわけではない。

ただおれにとつてはこっちが順だったのだ。わざわざ逆を気取ったわけではない。

書かれるべき文章など存在しない。

書かれるべき文章は、たとえばいま芸能界のスキヤンダルがエヘンゲフ

ンゲホゲホだが、それについておれの回答は、ダブルきゅうり鼻の穴タン

ボナーデーとなる。

ふざけているわけではない（ふざけている）。

ふざけてこんなことを言っているのではなく、マジでこっちが「順」なのだ。

もちろんわかってもらおうとは思わない。

ただおれ自身、マジだ、ということに気づいたのだ。

書かれるべき書物は存在しない。

だからおれはこうやってのびのび書いている。

ふつう、書かれるべき書物がなかつたら、書かねえわな。

おれはその逆だ。

書かれるべき書物を書こうとすると、ぐはあつ、と緑色のバブルを吐いてくたばつてしまう。

婚活に血眼（ちまなこ）になつてゐる女性は（男性も同じだが）、まず、自分が誰からも愛されないと可能性を、通常にありうることとして大前提にしなくてはならない。

だって、そりやまあ、いまのところ自分を愛してくれる誰かがないから、アプリに参入しようとしているのだろう。
ということは、アプリに参入したところで、きゅうに自分が愛されるようになり、ロマンスの神様に庇護を受けて、ゴーゴーへブンになるでしょうと、そんなことを前提にするのは見立てとしてヘンだ。

一生、誰からも愛されないという人はごろごろいる。

あなたがマッチングアプリで見かける登録者の大半について思うことだ、何の不自然もない。

それをいちいち、ショックだとか絶望だとか、おおげさに捉えすぎなのだ。

まるで、書かれるべき書物があると思い、それが書けないと苦しむというハズレ執筆者のようなことをしている。

誰にも愛されない、と苦しんでる、そのことに絶望している「溜まり」が、マッチングアプリの最下層にあるだろう。

なぜあなたはそんなところにみずから足を突っ込むのだ。

（マッチングアプリのことではなく、その「溜まり」のことな）

生きていて、ついに誰からも愛されなかつた、ということは当たり前にありうる。

そんなしょーもないことを恐れるな。

大前提にしておけ。

おれが自分の顔写真をマッチングアプリに貼り付けて、「楽しく愉快なタップです！」とプロフィールを書いたとして、誰かがおれのことを愛して

くれると思うか？

マッチングアプリに登録している何十万人もの女性はおれの母親ではない。

いや、仮に母親であったとしても、マッチングアプリに登録しているおれの顔写真とプロフィールなどは、母親でさえ愛さないだろう。

おれがあなたに詰め寄り、

「あなたもボクのことを愛さないんですね、ボクはショックだし絶望です」

と涙ぐんで言う。

なんなんだコイツは、マッチングとかそういうことの次元じゃない、とあなたは思うはずだ。

仮にあなたが、おれに向けて、

「わたしはあなたのことを愛しません」と言おう。

それについておれが、

「それでいいじゃん」と言おう。

一ナノグラムの嘆きも動搖もなしにだ。

「生涯、誰にも愛されなかつたとして、それはたぶんおれが悪いわけで、そんなことで世を呪う理由になりますか。春に桜が咲くのは別段わたしを愛したことではないけれども、桜吹雪の花道はわたしを邪険にするわけではなく、景色をわたしにもあなたにも等しく恵んでくれるではありませんか」

そうきっぱり言うようなら、あなたは少なくともわたしのことを、「割とまともな人だった」とは思つてくれるだろう。

それでじゅうぶんじゃないのか？

背の高い、デキる彼がいて、笑顔がステキだ。運動神経も良くて、いま活躍している真っ最中で、これからさらに大物になつていくに違いない、

そういうカレがいる。

「わたし、彼のこと本当に好きかも」とあなたは思う。

それはただの性的野心だ。

恋愛じゃない。

いや、現代ではそちらのほうが恋愛「らしさ」があるのだけれども。

有料チャンネルでやつてある恋愛リアリティショーは、すべて性的野心の展示会だ。

性的野心は悪くないよ。

おれだってこのあいだ、デカい黒塗りのセンチュリーリーを、若い美女が運転しているのを見た。髪の長さや、来ているワンピース、露出している肌、鼻にかかるサングラス、何もかもが高級だった。

高級なのだ。

近くに寄ることができたら、どんなにいい香りがするだろう。

強いときめきが起ころが、これはただの性的野心だ。

いくらステキに見えたからといって、いきなりその女性が自分の大切なものになるわけではない。

激しく好きにはなるし、とてももなく欲しくはなるが、いきなり大切なものにはならない。

彼女の、二十万円するハイヒールが折れることより、おれの使つている三千円のマウスが壊れるほうが悲しい。

三千円のマウスが壊れるほうが悲しい。

当たり前だ。

性的野心と、愛は、しばしば混在している。

性的野心を言い張る奴にかぎつて、バレンタインにこつそり愛を持っていたりするし、愛と言ひ張る奴にかぎつて、性的野心百パーセントでしかなかつたりする。

性的野心が悪いわけではない。

違うラベルを貼るのがよくないだけだ。

婚活者が、

「今回の彼は、わたしちょつと真剣に向き合えるかも」

と言い、ウェディングドレスへのプロセスを真剣にイメージしているのは、残念ながらの性的野心でしかなく、愛ではない。

もちろん、彼が体調を崩して入院したり、怪我をして包帯を巻いたりしたら、気の毒に思うし心配もするのだ。

だけど、それでただちに「大切な物」ということにはならない。

多くの人はきっと、本当に「大切な物」とか、「かけがえのないもの」とかをわからぬまま生きている。

せいぜい家族のことをイメージするだけだ。

無理に「大切な物」を言い張らなくていいのに……

恐れるな。

生涯、誰にも愛されないと、」「大切な物」や「かけがえのないもの」がよくわかつていないとかいうことは、じつにありふれたことであって、そんなにショックを受けるようなことではない。

そのへんを歩いているオッサンやオバハンはみんなそういうものだと思え。

あなたもそれと同じだ。そう思えば、あなたはなにも珍しい奴ではなくなるだろう。

性的野心しかない、言われてみたらそのとおりだということがあつたとして、そのことでしょげ返つて酒浸りになる、という必要はない。だいたいみんなそんな感じじゃないか、何も珍しいことではない。

フツーのことだ。

かといって、居直るようなことでもないのだろうけれどね。

アイドルオタクが、「握手会に通いつめていたら、百万分の一でも、ひよつとしたら」という空想をするのは、やはり性的野心であつて愛ではない。

思春期の少女が、さしあたり少女マンガに出てくる無理やりなイケメンに恋をするのも、性的野心であつて愛ではない。

人は、素敵なことになりたいのだ。

どうしてもまず、「自分が」素敵なことになりたい。

自分が素敵なことになりたくて、その手がかりといふか、端緒や可能性を掴むと、そのことに血眼（ちまなこ）になつて、「カレのことで頭がいっぱいなんです。わたし、こんなに人のことを好きになつたの初めて」

と言いだす。

それは残念ながらただの自己愛だ。

自分が素敵なことになる、という可能性から、自己愛の願望に火がつき、カチカチ山のたぬきみたいに走り回ることになつただけだ。

意地悪で言つているのではない。

あなたが眼球パキパキのおばけにならないように知識を与えていたるだ。

（ひでえ言いようだな）

自分が素敵なことになりたい、という、隠れた強い衝動がある。

自己愛の衝動だ。

自己愛の衝動は、ダサいので、なるべく剥き出しにはせず、「モチベーション」とか「好き！」とかの麗句でコーティングする。

そうして、コーティングして隠蔽したまま、裏側でうまいことやつて、何か自己愛を充足する「大物」を一発ゲットできないものか？ と、必死で画策する、そういうはたらきのことを「野心」という。

それは、誰かを愛するということではないし、自分が誰かから愛されるということにも無関係だ。

誰を愛することもなく、誰からも愛されることがなかつたとしたらどうしよう。

おれは、自分が誰からも愛されなくなつたら、ひたすらプレイステーションのゲームをやるだろう。

誰からも愛されないメンズたちがそうしているであろうように、おれもきっとそうするだろう。

ただおれは、自分が誰からも愛されないと、このことに対する怯まない。

プレイステーションと心中するというのは、そんなに悪くない人生だ。

せめてそれぐらいの開眼を得て、こころの底から笑えるようないと、

逆に誰からも愛されようがないじゃないか。

大切なものと性的野心を混同してはならない。

性的野心と自己愛の発火を、「好きなんです」というごまかしですり替えではならない。

その取り違えが許されるのは十一歳までだ。

繰り返す、十一歳までだ。

十二歳以降は、どこからともなくムエタイの選手がやってきて、あなた

の顔面に飛び膝蹴りを入れるので、そのつもりで注意していなくてはならない。

人は、生きているうち、誰からも愛されないかも知れない。

そんなこと、近所のおっさんやおばさんを見ていたら誰でもわかるだろう。

結婚したからといって、夫と妻が愛し合うわけではまったくないし、お互いに大切なものになるというわけではまったくない。

極端な不具合でも抱えていないかぎり、人はただ結婚するというだけならたぶん結婚はできるのだろうが、そのことは、自分が誰からも愛されないということの救済にはならないし、ただ結婚するだけでは性的野心の実現にもならない。

また、若く尖っているスケベレディがいたとして、そういうレディに男どもは寄つてくるだろうが、それだって男どもが性的野心で寄つていてるだけであって、けつきよくこうしたスケベレディが一生誰からも愛されないと、いうことはごく当たり前にある。

そうやって、ずっと男どもに言い寄られながら、誰にも愛されなかつたという女性はあるし、あるいは金持ちの男なども、ずっと女性らに言い寄られながら、けつきよく一生誰からも愛されないと、いうことが当たり前にある。

ここで大切なのは、順と逆だ。

生涯、誰からも愛されないかもしれない、その可能性は誰にとっても同じだ。

それをいちいちショッキングに感じ、絶望するというのが、逆だと言つ

ているのだ。

そんなことの何がいちいちショックなんだ?

誰からも愛されないと、いうことは、ありふれている何でもないことだ。

それが順なだけ、おれの言つていることは、きっと世間の大勢から見たら「逆」なのだろう。

書かれるべき書物は存在しない、だからおれはのびのびと書いている。それに引き当てて言うなら、おれは、愛されるべきなんて前提是存在しない、と言つてることになる。

だからこそ、おれはこうやって、のびのびと愛されているのかも知れないなあ。

おれの知り合いの、架空というよりもはやただのウソでしかない存在、八方田マキャベリ聰子さんは、(あまりにもひどい名前だ、こんな奴いるわけねえよ)

ハンググライダーに使う頒布を製造販売する会社に勤めているが、今年になつて入ってきた新人女性に腹を立てている。

その新人女性は、ぶりっ子をして、アイドルっぽい声や仕草をちりばめ、またおっぱいが大きいものだから、それを女の武器として、同僚の男たちに取り入つているのだ。

新人女性は、無防備でスキだらけの女の子というふうを演出し、無垢・清楚ふうを振るまって、男たちに「守つてあげないと」と思わせ、自分を囲わせている。

それによつて自分の立ち位置を万事において有利にしようというのだ。

「そういうのが、見ていて腹立つというか、それ以前にキモい。キモすぎて無理。でも、そんな馬鹿馬鹿しいものに、男連中がホイホイ乗つかつていくのが見ていてイヤすぎる」

八方田マキャベリ聰子はそう述懐する。

聰子は、何をそんなに嫌悪しているかというと、そのアイドルっぽい新女性、海江田フルバンジーなまこの主題が、自分と同じ性的野心だといふことに嫌悪を湧かせているのだ。

名前がバカバカしすぎて、話が入つてこねえなあ。

こんな名前の女の子が囁われたりしねえよ……

聰子のほうは、意欲も高く、前向きで強気で、そこそこデキる女として自分を誇示しながら、女性としてはギャップのある気さくさで男に親しく身を寄せ、男に「あれつ、いけるかも」と思わせるのを手口にしている。

一方、なまこは守ってやらないといけない無垢な女として男に身を寄せ、誰にでも「頼りにしています」という上目遣いを向け、男に「あれつ、いけるかも」と思わせるのを手口にしている。

なお男どもが「いけるかも」と感じて発火するというのも、男どもの性的野心にすぎないのであって、愛がどうこうということにはならない。

ともあれ、聰子となまこは共に、そうして性的野心を主題にして生きているのだ。

だから、お互の存在が気に障る。

まるで、自分の主題が、けつきよく女の武器を駆使しての、性的野心の実現にすぎず、本当には自分で何かをするつもりがないということを、浮き彫りにされているように感じるのだ。

だから腹が立つ。

ひょっとしたら、お互に内心で見比べて、お互に「あれよりはマシ」と思っているのかもしれない。

そりやヘイト感情も特盛になるというものだ。

彼は、車が好きで、その趣味についてはちょっとマニアックだ。

その趣味について、聰子は「理解のある女性」として振る舞おうとする。

なまこは、「えー、教えてほしいです」というスタイルで振る舞おうとする。

そりや、お互のことが透けて見えて、腹が立つわな。

そんなアホみたいなことをしていないで、たかが趣味というなら、せめて自分が根こそぎ好きな趣味を自分自身で持つたらどうだい、とお互に思う。

お互に思うし、お互自分自身についても思うのだ。

性的野心しかないのか、と。

性的野心……けつきよく、誰かにぶらさがって、自分をなんとかしてもらおうと思っている。

まるでそのことを、自分の夢のように語つたり描いたりするが、それはどうやら本当にただの性的野心のようだ。

野心、つまり、「一発当たりやあ、自分も勝ち組つてもんよ」ということ。

特別にデキるイケメンを、一発ゲットすりやあ、それで自分は勝ち組つてもんよ、というようなことを考えている。

だから、彼のことを大切に思っているというようなことは、本當はないわけだ。

誰かのことを大切に思うなんてことは、むしろ人が生きているうちに例外中の例外として起こることであつて、そんな特別なことを、自分にとつて当たり前に降り注いでくるものと思つてはいけない。

性的野心なんてものは子供のうちにさえ発生する。

小学校三年生の男の子が、身体的に発育して、運動会でリレー競技を走つてみたら、思いがけず速くて優勝した。

先行する走者たちをごぼう抜きにして、それはそれは、運動場全体はいつせいに盛り上がったのだつた。

彼はヒーローになつた。

同級生の女の子は、これまで彼のことに注目していなかつたけれど、そのときから、

「わたしは、〇〇くんのことを、いちばんわかつてあげられる人になりたい」

と思つたりする。

「〇〇くんが走るところを見て、わたしすつごい彼のこと尊敬したのね」

みたいなことを日記に書くかもしれない。

でもそれで、〇〇くんのことを大切に思つてゐるわけではない。

ヒーローにくつづきたいだけだ。

アイドルにくつづきたいオタクの空想と同じ。

残念ながらただの性的野心でしかない。

若さにあふれ（本当はそんなに若くなかったりするが）、エロくて派手な服に身を包み、舞台上でライトを浴び、性的な自分を堂々と示し、声を出して唄ったり、飛んだり跳ねたりしてダンスする、特別な会場で乱痴気のサウンドと音量、そしてメンバー同士で抱き合つたりはしゃいだりするという、これまでの自分ができなかつたことのすべてを、きらびやかにやっているアイドルの女の子がいて、自分もそれにくつつくことで、結果的に自分もそれを手に入れたということにしたいだけだ。

彼女のことが大切なのではなくて、自分が華やかな人生を歩んだということにしたいだけ。

性的野心だ。

おれは、性的接触一発で、黒塗りのセンチュリー車と美女とのセックスと、すべての高級・高額な世界に、しつこく住み込みたいのだろうか？

自分がセックス一発で「上等」なやつになれるかもしれない。

人はそのことに駆り立てられるが、それはあさましき野心であつて夢ではない。

人は野心というものがあるのだ。

あなたがノーベル賞を獲ることを想像してみたまえ。

想像したか、イメージしたか。

あなたの想像したノーベル賞というのは、ノーベル賞の授賞式だ。

スポーツライトを浴び、トロフィーを授与されて、満座の壇上でコメントを求められ、拍手を受けており、世界的有名になるという自分だ。

ノーベル賞を獲るとイメージしたとき、まさか、二十五年もひたすら実験室にこもり、何千枚ものレポートを積み上げ、徹夜でフラフラになりながら、ひとり研究を続いているなんてことはイメージしない。

ノーベル賞を獲るのって、本来そういうことだと思うけれどね。

あなたが女優になつたときのことを想像すると、あなたはもう、カンヌ映画祭の授賞式に立つているのだ。

夜な夜な台本を覚えようとして覚えきれず泣きそうになつたり、バレエのレッスンで爪先が割れそうに傷んだり、役作りのためにあと八キロ痩せ

なくてはならなかつたり、そこまでしたのに降板させられて代役に座を奪われたり、生活費とレッスン代のために時給の安いアルバイトでコキ使われたりと、そんなことをイメージはしない。

女優になるというのは、本来そういうことだと思うけれど。

あなたは、自分が何かをやりたいという主体性なんか持つていなくて、野心だけを持っているのだ。

一発当ててノーベル賞を獲り、一発当てて主演女優賞を獲りたいと思っている。

実験室にこもつて研究がしたいわけではないし、台本を握りしめて役作りや演技がしたいわけでもない。

それと同じで、あなたは、彼のことを大切に思つていいわけではなくて、ただ一発当てて、デキるイケメンを獲りたいと思つてているだけだ。

性的野心においては、その「一発」というやつが、じつさいにあるかもしれない。可能性はそこそこリアルにある。そういう感じがする。

それで駆り立てられる。

「いけるかも」と感じ、いつのまにか、それは自分にとつて既定路線になつている。

ただそれだけのことだが、現代ではそちらのほうがむしろ「恋愛らしさ」がある。

そんなのおれの主題じゃないから細かく書かないけど……

八方田マキヤベリ聰子は、背の高いデキる彼のことを意中にしながら、いっぽうでは惰性的に、枯柳搖男と酒を飲んでいる。

これまたひどい名前だ、こんなやつ存在しねえつて。

枯柳搖男は会社の同期で、ついでに出身大学も同じだ。

聰子は枯柳搖男に言い寄られている。

付き合つてくれとか何とか言つてゐるが、
「要するにわたしとヤリたいんでしょ」

と聰子は見抜いている。

「まあ、こんだけ言い寄つてくるからには、わたしのこと好きなのはたぶん本当に好きなんだろうけど……」

八方田マキヤベリ聰子は、枯柳播男と酒を飲んでいると調子がいい。ウマが合うというか、飲み友達としては正直悪くないと思つていて。なぜウマが合うのか。

それは、枯柳播男もまた、性的野心で挙動しているからだ。

要するに、そこそそイイ女といえる聰子をモノにすることで、自分の性的な実績を増やしたいと思っている。

何であれば、それで自信を恢復したいとも思うし、そのことを、これから進んでいくことの弾みにしたい。

けつきよくのところ聰子は、お目当ての男とうまくいっていないので、さびしがつており、そのところをうまく突いていけば、

「いつか落ちんでしょう」

と枯柳播男は思つていて。

聰子はそれについて、

「ぜつたいそんなつもりない。別に、そこまでそれがイヤつていうわけじゃないけど、なんか思い通りにされたら腹立つし。だからヤラせてあげない」

と思っている。

聰子は、枯柳播男の挙動の仕組みが手に取るようになるのだ。

枯柳播男は、ただ安っぽい性的野心ばかりで挙動しており、聰子はそれを「逆にわかりやすい」と思つていて。

そして聰子は、枯柳播男を見ていると、さすがに内心で見下すところがあり、

「言つちや悪いけど、さすがにわたしはコイツよりはマシだわ」と思つてゐるのだつた。

聰子は何もおびやかされずに済む。

それでさらに、枯柳播男が下手（したて）に出て、ずっと聰子を口説いてくるのは、聰子にとって不快なことではなかつた。

だから聰子は、枯柳播男と酒を飲んでいると調子がいいのだつた。聰子は枯柳播男について「なんとか居心地だけはいいんだよね」と不思議がつているのだが、仕組みはそういうことだ。

いま、恋愛と思われているものの多くは、残念ながらただの性的野心といふのがほとんどだ。

大切なものとか、かけがえのないものがそこにあるわけではなく、お互にただ性的野心を向かい、そのことを衝迫力としている。

そこにこそ、本当に譲れないものが露出し、本当に欲しいものが暴かれ、本当は要らないものが明らかにされるという感じだ。

むしろそうした性的野心の力こそが、リアルで真に「恋愛らしい」として贊美を受けているほど。

しかし性的野心は、けつきよく愛ではないし、それじたいが大切なものではないため、気づいてしまうと追い詰められるところがある。

八方田マキヤベリ聰子も、なぜか唐突に、しばしばという頻度で、

「ああもう、死にたい」

みたいなことを思うのだ。

特に理由はない。

こんな仕組みに生じている理由などを聰子が発見して読み取ることはまづできないし、読み取つたら読みとつたでさらにまづいことになつてしまふだろう。

大切なものの、かけがえのないものを、得てきていないのに、自分はずつと恋愛をしてきつてゐるつもりでいる。

そんなことに気づくとけつこうシャレにならないぐらいまづいだろう。

八方田マキヤベリ聰子は、ひさしぶりに自分が本気になれる相手に出会えて、救われたように思つていて。だ。

「やつぱり本気で恋をしていないときのわたしつてダメだわ」

聰子は自分のことを恋愛体質だと思つていて。

まさか、へへ性的野心に賭けるという発想しか持つていらないvvなんてことは考えもしない。

聰子は現在の自分自身を、わりと「キラキラしている」と思つており、特にいまは「わたし、本当の気持ちで動けている」と思い、そのことに自信を恢復しているのだ。

でもこうして、他人事として客観的に眺めていると、きっと八方田マキ

ヤベリ聰子は、自分自身で何か本当のことを為し遂げようとはしていかないのだろうな、と思える。

聰子は、かけがえのない友人たちと、かけがえのない時間の中を生きていく、ということにはならないのだろうな、とわれわれは予想してしまった。

おれは、自慢じゃないが、かけがえのないものの中を生きてきている。

これは逆に堂々と自慢ということにしておこうか。

おれはかけがえのないものの中を生きてきている。

おれがこの世に生まれた理由、その価値というものは、もう何十年も前に満了している。

かけがえのないものの中をじゅうぶんに生きさせてもらつた。

おれが満たされたために必要な体験の、何十倍も、もう与えてもらつた。

だからもう隕石が降ってきて死んでしまつても、おれからは何も文句はないのだが、それでも隕石は降つてこないし、落雷も当たらないので、ぬけぬけと生きており、ぬけぬけと生きさせてもらえているので、ぬけぬけとさらに大切な物にまみれて生きていこうと思っている。

おれはあつかましくて強欲なのだ。

おれは性的野心に、気でも狂つたのか、小説のモチーフを得ようとしたりする。

だからおれは黒塗りのセンチュリーを乗り回していた、どこの誰とも知らぬ美しい女のこと、勝手にアイツ呼ばわりして愛している。

おれは性的野心に救済を求めなくていい。

ああ、なんてラッキーな奴なのだろうおれは。

男というのはふつう、おじさんになり、おじいさんになつても、性的野心に救済を求めるくてはならない生きものなのだ。

こんにちの、「いただき女子」と「ギバーおじ」のニュースを聞いていればわかるだろう。

女子は金権のおじさんに性的野心を向けねばならず、おじさんは路上をさまよっている若い女の子に性的野心を向けなくてはならないのだ。

それはもうさすがに恋愛ではない、はずなのだが、現代においては、こそがまさに恋愛という風情が漂っている。

性的野心と愛はしばしば混在するが、混在していても区別はつけろ。

そしてどちらが主題になるかだ。

どちらが順で、どちらが逆か。

おれは愛が順だと思っているが、世間では性的野心が順だと思われている。八方田マキヤベリ聰子は、なにもふざけていない。

八方田マキヤベリ聰子は、なにもふざけていない。

世の中は、八方田マキヤベリ聰子を応援し、彼女の味方になる。

では、八方田マキヤベリ聰子は助かるのだろうか？

その問い合わせについては、きゅうに世の中は口をつぐむか、退避の態度をとる。

一方、おれは助かるのだろうか。

世の中の文脈では、おれみたいなふざけた奴は、助かつてはならないと

いうことになっている。

おれはおれの「順」を、大真面目に進んでいるつもりなんだけどなあ。覚えておけ、SDカードだけは、バツタモン屋で買わないと、値段が異常に高すぎるので。

正規品を販売している、カメラ屋のおやじに、その点だけはだまされないように。

(この部分は本旨に何も関係ないが、SDカードだけはバツタモン屋や通販で買うしかないというのはマジだ)

八方田マキヤベリ聰子は、女性としていくつもの美点を持っており、肢体にじゅうぶんな美貌と性的魅力を具えている。

それに比べて、おれなどはどこにも美点を持つておらず、肢体に美貌や性的魅力を具えていない。

八方田マキヤベリ聰子は、自分が愛されるべきだと思っているが、おれ

はそうは思っていない。

八方田マキヤベリ聰子は、夜な夜な追い詰められて「死にたい」と思っているが、おれは追い詰められない。

おれは夜な夜な飛び立っているよなあ。

八方田マキヤベリ聰子は、背の高いデキる彼のことについて、「本当に好きなんです」

と言った。

ところが背の高いデキる彼は、大手の取引先にヘッドハントされ、なんどどこかの家柄を継いでくれという話になり、その家の長女と結婚して婿入りしてしまった。そのとき長女はまだ十九歳の処女だったという。

八方田マキヤベリ聰子にとって、彼などはまったく大切な人ではなかつたということが明らかになつてくる。

聰子はただ、自分が素敵したことになりたかった。

聰子は彼のことを、

「そんなロリコンみたいなところがあるとは知らなかつたし、家柄とか、そんなことに飛びつくとは思つていなかつた。いま思い返すと、うわー、無理。なんかもう、何もかもがキモい」

と言い、顔をしかめて笑つた。

それで聰子はいつから枯柳搖男と寝るようになった。

枯柳搖男はやたら執拗に電動器具で聰子のことを責めた。

はじめ聰子はそのことを馬鹿にし、ベッドの上で大笑いするほどだつたのだが、ある夜聰子は、

「死にたい。何かわかんないけど、ちょっと来て」

と枯柳搖男を呼びつけ、その夜初めて彼の電動器具は聰子の芯まで効いた。

聰子が薄目を開けたとき、そこには執拗に聰子のことを責め立てる枯柳搖男の顔があつた。その顔は無表情のようで、同時に眼球に狂気の熱をはらんでいた。

いじめられた少年が、夜な夜なひとりで鋼板を相手に、復讐の溶接作業をしているというような顔。

聰子はその顔に、

(まつたく大切にされていない。コイツはただ自分の満足のためにだけ、こういうことをする奴なんだ)

と直観し、その直観がトリガーとなつて、聰子の中枢が開いていった。中枢に電動器具の振動が届き、聰子は激しいオーガズムに呑み込まれていった。

なんだこのどうでもいい話は、まつたく主題じゃねえ。

こんなものに情感を高めるアホは、罰として、青森まで行つて大間産の本マグロのサクを買い、それを東京都足立区のカラスに食わせろ。往復は在来線でだ。

おれはふざけている。

八方田マキヤベリ聰子のほうはシリアルスだ。

八方田マキヤベリ聰子、あんたに恋愛なんかないよ、ぜんぶただの性的野心だ。

八方田マキヤベリ聰子のことを、大切に思う人はいないし、八方田マキヤベリ聰子は、かけがえのないもののなか生きていかない。

誰かに性的野心を向けられることを恋愛経験だと思っていて、誰かに性的野心を向けるのが夢だと思っているんだろう。

だから、他人の恋愛に猛烈な口出しをするのだ。

誰かの大切なものに対しても、人は無節操に口出しなんかしない。

性的野心の経験しかないから、平氣で口出しが止まらないのだ。

八方田マキヤベリ聰子に、恋愛経験なんてゼロだし、これから先もゼロだよ。

残念ながら、根本的にバカで、根本的に誤解を抱えていて、その顔面に正論と厚化粧をほどこしている。

だからだ、性的野心と大切なものの区別をつけろ。それに比べりや自分が愛されるとかどうとかいうのはハナクソみてーにどうでもいいことじやないか。

〔性的野心〕

あなたの

「うらやましいことは

何だろうか

話の内容が思い出せない。
いや、誰かに聞いた話なんだけれど。

若い人は、他人のインスタグラムがうらやましいんだ、という話。
へえーそうなんだ、と、おれは驚いた記憶がある。

が、全体がどういう話だったか思い出せない。
なんか、うつすらとした記憶だと、
「わたしたちは、他人のインスタを見て、他人が充実しているのがうらや
ましくて、自分を顧（かえり）みて悲しくなって、それで鬱ソングを聴く
んです」

みたいな話だったような気がする。

でもただの気のせいかもしれない。

頼りにならない記憶だなあ。

とりあえず、他人のインスタを見て、それをうらやましいと感じるとい
うのは、おれにとつて驚きだった。

驚きだつたけれど、考えてみれば当たり前だつたかもしれない。

おれは、他人のインスタを見ても、何もうらやましくないけれど……

おれも若いころは、何かをうらやんだのかもしれない。

いつから、うらやましくなったのだろう。

いつからのかは、はつきりしない。

おれが、寒空にひとり、コンビニのおにぎりを食っているときに、他人

のインスタを見て、他人がわいわいがやがや、着飾つてフォアグラとキヤ
ビアを食べても、うらやましい、とは思わない。

おれは、寒空にひとり突っ立ち、コンビニのおにぎりを食つていると
き、これ以上なく充実していると思う。

もし充実していなかつたら、おれはヒマなので、もつと手の込んだ料理
を自分で作つて食つているだろう。

寒空に突っ立つて、コンビニのおにぎりを食つてているということは、そ
のときおれは走り回つてゐるのだ。

だからおれにとつて、吉野家の牛丼などは、むしろ充実というイメージ
になつてゐる。

部活動で、徹夜の作業をしていて、「おい誰か晩メシ買つてこい」と後輩
に言いつけると、買つてくるのはたいてい吉野家の牛丼だつた。
明るい元気な女の子をナンパして、気づくとどこか知らない駅前にい
て、よくよく話を聞くとその女の子は韓国人で、夜中まで飲んで酔つ払つ
て、彼女は家に泊めてくれると言うのだけれど、そこまではいいやと言つ
て夜中の駅前をひとりで迷走し、どうしても腹が減つたというとき、国道
沿いに吉野家の看板が光つてゐるのだ。

現在のテレビタレントが海外ロケをしていても、それをうらやましいと
は思わない。

ただ、もつたいないなあ、とだけ思う。

海外ロケとて、海外の食事やホテルを「ネタ」にするだけで、それ
では何の体験にもならないのだから、もつたいないと思う。
おれが旅先で、観光ガイドに載つていない温泉街に迷い込むほうが、お
れ自身にとつては楽しい。

楽しいといふか、自分の冒険に巻き込まれて、おれはどうぞきしてい
る。

おれはその迷走を、収録して、コンテンツにしようとはまったく思わな
い。

むかし、あるカフェが閉店するということになつて、おれは店員さんと
一緒に写真を撮つたのだが、おれはふと気づいて、写真を撮る前に、

「おれ、こういうの、どこかにアップロードとかはしないから」

「そなんですか？」

「うん。自分が記念に撮った写真を、赤の他人に見せるというのが、おれにはさっぱりわからんのだ」

そういうえば、おれのウェブサイトはもう十数年続いているのに、テキストばかりで、おれが気まぐれに撮った写真なんてぜんぜん載らないだろ。

おれは一眼レフを三台も持っているのにだ。
（うち一台はニコンのフルサイズで、ほか一台にはフィルムカメラもある

ぞ「ただの自慢」）
旅行記、みたいなものを書けば、それに写真を添える可能性はあるかも

しれない。

けれども、たとえばおれが、仮に五つ星ホテルのロイヤルスイートに泊まつたとして、そのテラスにプールがついていたとして、おれはその部屋の写真を他人に見せたりはしないし、窓からの眺望を写真に撮つて人に見せたりはしない。

あるいはおれが、仮に筋トレをして、仮に全身を脱毛し、仮に筋肉の引き締まつた細マッチョになつたとしても、おれはその細マッチョの半裸を写真に撮り、「ジムに来ました」と言つて他人に見せたりしない。

そういうことが、悪いと言つてているのではなく、おれにはそうしたこと

をする動機がないのだ。

おれにとつては、そうしたことにモチーフは見い出せず、主題は見つか

らず、だから人に見せる動機がない。

そうして考へると、一般の人には、単に「うらやましい」という動機があるのかもしれない。

うらやましい、および、うらやましがらせる、という動機があるのかもしれない。

おれにはよくわからない。

おれには、初夏のころ、薰風吹き抜ける青空のもと、オープンカーで走

り回つてみたい、という願望がある。

けれども、じつさいにそうして走り回つているオープンカーを高速道路で見かけても、それについてうらやましいとは感じない。

だって、おれが乗つてているわけではないし、おれが運転しているわけでもないし。

おれの知らないどこかのおじさんが、どこかのお姉ちゃんを助手席にのつけて、オープンカーで走り回つているのを、うらやましいと感じる仕組みがおれにはいまいちよくわからない。

おれ自身が若いころはそうでもなかつたのかな？

おれ自身が若かつたころ、何かうらやましかつたことといえば、たとえば、同期の男が付き合つているのがJALのスチュワーデスだつたりとか、知り合いの男が当時の読者モデルの女の子とラブホテルに行つたりとか、おれの知らないところで開いていやがつた合コンの相手がテレビ局の女の子たちだつたりとか、そんなことだらうか。

スケベな話ばっかりだな。

なお、スチュワーデスと付き合つてているという話については、じつさいに会つてみるとその女性はあんがいプライベートでは気難しいタイプだつたので、「あっ、けつこうたいへんなんだな」と思い、うらやましさは消えてしまつた。

おれは、自分がどう生きるかのすべてを、自分で選択し、自分で実行しているので、他人の何かをうらやましいとは感じない。

とつぜん、買ってもない富くじがあたり、その賞品としてロールスロイスがプレゼントされたとしても、そのことはそんなにおれにプラスにはならないという気がしている。

気がしているというより、はつきりと、そんなことはおれのプラスにはならない。

おれにとつてうらましいことと言えば何だらうか。

もし、不動産として、自分のダンススタジオや、自分の収録スタジオなどを持つていれば、こんなに毎週、ガチャガチャ荷物を運んだり、あたふたと機材のセッティングなんかしたりしなくて済むのに、とは思う。

そうは思うけれど、仮にそうした不動産を所有していたとして、何かが良くなるのかというと、うーん、良くはなるのだろうが、プラスにはならないだろう。

遠くへ旅行するのに、リニアモーターカーが開通すれば、時間が短縮できるので、良くはなるのだろうが、それでつまらなかつた旅行が楽しい旅行になるわけではない。

快適ということは、とても良いことだが、飛行機のファーストクラスに乗つたからといって、それだけで旅人になれるわけではない、とおれは思つてゐる。

毎日がウキウキで楽しいレトリバードがいたとしたら、彼の寝床がせんべいぶとんでも、ふかふかの北欧家具でも、あまり違ひはないのではないだろうか。

目黒駅前の、権之助坂の中腹にある「大宝」という店は、おそらく店内が狭く、輪をかけてさらに厨房は狭いのに、きちつとした職人のお兄さんが、ものすごくきちつとしたとんかつを揚げてくれるので、すげえなあと思わされる。

とんかつ屋としての快適さはまつたくないはずなのに、すごい。

めつちやウマいし、お弁当も出しているから、目黒駅に寄られる用事のある方は、ぜひいちどご検討ください。

おれがうらやましかつたことは何だろう。

先ほど述べたように、若いころは、派手な合コンで派手なねーちゃんをしてこましているのは、うらやましかつたのかもしれない。

だが、そのことにも何か違和感がある。

なぜ違和感があるかというと、おれがかつて、そうしたスケベネタを「くうーうらやましいー」と言つていたとして、そこから鬱ソングを聴こうという発想にはまるでならないからだ。

鬱ソングを聴こうという発想になるのは、なんというか、もつとシリアル

スで、もつと重症な何かだ。

おれは、うらやましいと思い、うらやましいと言いながら、けつきよくのところ、アホになつてでも走り続けようとする誰もに対し、おれも立ち

止まりたくない、意地を張り、そのことに必死だつただけかもしねない。

同じうらやましいと言つても、その内実にはいろいろ種類があるのだろう。

うらやましいことといえば、むかし、女にぜんぜんモテない男がいて、そいつがめずらしく女の子に色よく相手してもらうことができ、すっかり恋に落ちて、電話口で必死に口説いているのをおれは横で聞き、何はともあれそいつはそのときアホ丸出しの全力だったから、おれは当てつけられて、自分自身について、

「あーあ、おれは何をやつてているんだろう」

と思い、アホ丸出しで全力のことをやつてゐるそいつのことを、二分間ぐらいうらやましく思つた。

それにしても、だからといってそこから鬱ソングを聴こうという発想にはならない。

うらやましいということ以前に、もともと何かがキツツいのではないだろうか？

なんとなく、そ�は言つてみたものの、自分でさえ何を言つてゐるのか、よくわからないのだつた。

うらやましいことといえば、そうだ、ひとつ思いついた。

まつたく検索しなくていいが、動画サイトで「オゴウ クラハシ」と検索をかけると、あなたのまつたく知らないものが出てくる。

もう一度言うが、まつたく検索しなくていい。

出てくる動画は、それじたい二〇一八年とかのもので、もう古いのだが、ともあれその動画の中では、もうとつくに中年のおじさんたちが、何かにムキになり、バチバチのやりあいをしているのだ。

二〇一八年から見て、もう二十年ぐらい昔のゲームの話、二十年ぐらい昔のゲームセンターの話を、

「お前、あのときのアレは何だつたんだよ」

というふうに、本気で言い合つてゐる。

うらやましい。

つまり、彼らは「ストII」の話をしているのだ（正確にはストIIXだけど、そんなことどうでもいいだろう）。

当時、時代のトッププレイヤーたちだつた彼らは、驚いたことに、二年後もトッププレイヤーであり続けている。

彼らにおいて、二十年前、ゲームセンター、唐突に与えられるたまり場、何の得にもならないのに帰宅してまで脳内で自分のプレイを突き詰めていく夜、縁もゆかりもない奴とあたらしく知り合うばかりの日々、強さと意地だけを認め合う仲、そうした時代が本当にあり、そうした熱気が本当にあり、そうした中を本当に生きたんだなあとことが、いま現在も息吹をもつて伝わってくるのだ。

ああ、うらやましい。

アホみたいな話だ。

だつて、ただのストIIの話だからな。

ふたりはいつからか、因縁があつて、怨恨があつて、バチバチにやりあつていて。お互に、決して譲れないものを抱えている。そのまま二十年ちかくを過ごしてきた。

すべて「ストII」の対戦についてでしかない。

それを、ネタでやっているのではない、マジなのだ。マジでバチバチにやりあつていて。マジで仲が悪い。

でも、同じゲームの話をしているのだ。同じゲームで、二人して、そのゲームにとても深く理解を持っている。

そりやそうだな、二十年間もトッププレイヤーであり続けているんだから。

観ていて、本当に仲が悪いというのがわかる。

けれども、ふたりともずっと同じゲームの話をしているので、仲が良いんじやないのかとも見える。

でも本当に仲が悪いのだ。まさに犬猿の仲で、もはや不俱戴天という趣き。

わけがわからない。観ていて脳が搖さぶられる。

ものすごく仲が悪いのに、そのふたりを、また周囲の人々を、今もまだ

あのときのゲームセンターとストIIの世界が包み込んでいるのだ。

それはきっと、一般に知られている「ゲーム」、一般的な意味での対戦ゲームやアーケードゲームとは違う世界だ。

それで、そのふたりのバチバチのやりあいは、仲介人の案内によつて、「こうなつたら、対戦で決着をつけましょうか」と進んでいく。

そしてふたりとも、そっぽを向きながら、そのことには意味ありげにうなづく。

そこには、双方からの、「おれたちはそうして、やつてきたんだから」という声が聞こえてくるのだ。

なんて感動的で、なんんアホな話だ。

大のおとなが、二十年ちかく前の因縁を、二十年前のゲームで決着させるという。

それも、ふたりとも、あのときのまま続いている、現役のトッププレイヤーとしてだ。

こんなに、壮大さと、ささやかさが、ちぐはぐに現れているストーリーを、おれは古今に知らない。

そしてじっさいにその対戦は実現され、なぜかその対戦はオンラインでなんと一万五千人が見届けことになつたという。

じっさいの対戦がどのようであつたかは、このゲームをかなりやりこんだ人にしかわからない。

そうして、聞いてもわからないという前提で言うと、リュウの突つかりようはまるで羅刹の気魄だつたし、それでもそれを怜俐にさばきつづけるガイルはまるで何かの哲学が実体化したかのようだつた。

両者が、ぶつかりあつて、通じ合つて、衝突し、よろこびあい、敵対し、尊敬し、燃焼して、冷静で、もう何がなんだかわからない。

なんの試合だ、これは。

おれは、ひたすらうらやましいと思いながら、それ以上に、とても余人の踏み入れる領域にないと想い、厳（おごそ）かに引き取る気持ちになつた。

た。

根底はアホみたいな話なのにね。

うらやましいからといって、そこから鬱ソングを聴こうという発想にはならない。

そしてやはり、赤の他人がオープンカーに乗り、赤の他人が五つ星ホテルに泊まり、赤の他人がフォアグラとキャビアを食べていることに、おれは何のうらやましさも覚えない。

おれはただ、

「おれももつと、アホに生きよう」

とばかり思う。

アホに生きた実物、そしてアホたちにしか為しえないシーンを見せられると、どうしても、おれはうらやましく思うので、おれも可能な限り、アホに生きようと思う。

あなたのうらやましいことは何だろうか。

鬱ソングにつながっていくようなものは、何か違うんじゃないかと、おれは思っている。

〔あなたのうらやましいとは何だろうか〕

よくよく考えたら、おれが書いても書かなくても同じだ。

森林が砂漠化しているとして、「砂漠化しています」と書かなくても、森林は砂漠化している。

書くということに、事象への作用力はない。

だから、書くということには大きさがないのだ。

大きさはゼロであって、数学で言うところの、点Pのような大きさしかない。

点Pには面積も体積もない。

書くというのはまさにそういうことだと思ふ。

「デカいことなど書きようはない。」

「デカいことについて書くことはできるが、書くところじたいはデカくならない。」

台所のコンビーフ一缶について書くことと、ヨーラシア大陸の歴史について書くことは、同じだ。

何を書くかということ、どうやって書くかということについてば、ideaがない。

書く、という表現・作品に向かうとこういとじたいの idea (考え方) は必要だが、何を書くとかどうやって書くとかの、実作の段階には idea がない。

idea を持つて取り組めば、あなたは必ず挫折してしまうだろう。

人は

さひしに

自我に穴があく

idea などといったものは、世間通用性への揉め事の中から、苦し紛れに生じてくるものにすぎない。

意味がわからないが、じつに正しいことを言つてゐるので、説明などはしないのだった。

現代人は承認欲求に苦しんでいる。

SNSをやつていらない人も承認欲求に苦しんでいる。

それは、世間が……

もう、膨大な面倒くささが予感されるので、思わず書くのをやめたくなってしまう。

現代は承認欲求のバケモノを生み出してしまうのだ。

それは摩訶不思議なことではない。

あなたが Youtube を始め、Youtuber になつていいとしたら、まず初めに idea を問われるだら。

どういう動画、どういうコンテンツを提供していくのか、その idea を問われる。

まさか、近所の工事現場をえんえん撮影して、無言をつらぬくナゾのチヤンネルというわけにもいかないものなあ。

おれが言うと、それだけで何かあたりしい idea なのかと錯覚されてしまう。

おれはいま、この十五年でわれわれにめたらされた、つぶやきの病について書こうとしている。

そして、そういう idea がある以上、これについては書けないのだ。書けないといって、それじゃあ主題が取り扱えないじゃないかといつになり、困る。

だから、主題はありつつも、それが idea になつてはいけないのだ。

いのことは厳しい。

idea によってではなく、"思いがけず" 主題へ到達しろといふのなものだから、むつかしいも何も、アプローチの仕方が存在しない。

まあそれでも、たぶん到達するんだろうと、おれは思つていて、あつかましく構えている。

なぜ現代人は承認を求めているのか。なぜ承認を必要とし、承認を渴望しているのか。

逆に言うと、なぜおれは、こうも承認を必要としていないのか。

おれが承認を必要としていないのは、おれはもう承認されているからだ。

おれは世界に承認されている。

まさに、これだよなあ、とおれは歓喜しているのだ。

おれは承認されているけれど、多くの人は承認されていない。

それで一般の人々においては承認欲求が爆発している。

「つぶやき」とは本来どのようなものだったか。

それは、

「発信を意図しない、主にわだかまつたホンネが不随意に漏出するもので、かつ最小の音量のもの」

だつた。

たとえば、アメリカ大統領の所信表明演説は、発信するものだからつぶやきではない。

酔っ払いが電柱とケンカしている場合、発信は意図していないかもしねないが、音量が最小ではないのでつぶやきではない。

ルワンダ大虐殺に先だって、ラジオ局は「隣人を監視しろ」と発信したが、これも発信しているのでつぶやきではない。

トイレの個室の壁に、「○○殺す」と小さく落書きしたとしたら、音量は小さく見えるが、不随意のものではないので、これもつぶやきではない。

あなたがテレビを観ているとき、やたら声がでかくてうるさいばかりの若手芸人がいたら、

「こいつ、うるさいなあ……」

とつぶやいておかしくない。

あなたはそれを発信しようとしているわけではないし、音量も最小限だ。

わだかまつたホンネが口元から漏出しているだけであつて、これを本来は「つぶやき」と呼んだ。

これが、たとえば老人になると、もうテレビのワイドショーとかに向かって、
「いや、それはおかしいだろ！　あのな、そもそも。向こうがそんな
いやらしいことをしなければ、な、こんな揉め事には……」

と、でつかい声で話しかけるようになる。
それは音量が最小ではないので、娘から、

「もう、声でつかいなあ。テレビとおしゃべりするのやめてよ」

とたしなめられるのだった。

そこまで声がデカくなると、もうつぶやきとは言えない。
われわれはこの十五年、ずいぶんな誤解をしてきた。

そもそも、ツイートというのは「つぶやき」という意味ではない。

このことは、オーディオ・オタクたちは、言われてみると気がつくだろう。

ハイエンドスピーカーの一部には、ツイーターという機構があるのだ。
スピーカーコーンとは別に、高音部分を担当する部分で、その機構はいかにも「さえずる」という感触で駆動する。

ツイートは「さえずり」なのだ。

さえずるというのは、鳥たちが春の恋を、非言語的に喉から鳴らすとい
うことや、舞踊のうち、舞いながら漢文を朗誦するというようなことだ。

上司にパワハラを受けたというような怨念のレポートを「さえずり」と
は言わない。

われわれは、さえずりをつぶやきと誤解し（なんでこんな誤解が起こつ
たんだ？）、さらにはもともとのつぶやきというものがどういうものだった
かを見失つていった。

あえて、とつぜん冷静になつて申し上げるが、つぶやきたければベッド
で寝転んでひとりでつぶやけ。

つぶやくということにアプリは要らない。アカウントも必要ないし、スマートフォンもPCも要らない。

冬のモンブランに単独登頂して、その山頂でひとりつぶやくとき
に、アプリなんか要らない。吹雪の中でひとりでつぶやけ。

いま、漢文の詞章でも口唱するべきところ、さえずるのではなくつぶや
くようになり、そのつぶやくというのも、

「発信を意図し、わだかまつたホンネを恣意的に拡散するもので、最大の
音量を目論むもの」

にすり替わっている。

めちゃくちやだ。

だから、ここにはさえずりもないしつぶやきもないのだ。

何があるのかというと、もはや、自我に穴があいた人々の咆哮があると
しか言えない。

おれの言つていることは大げさに聞こえる。

けれども、おれが知つていることは、あなたが「本当に」何かをしよう
としたときには、この問題は一気に表に出てくるということなのだ。

自我に穴があいて、うんぬん、これが、あなたに「何一つ本当のことは
させない」というように、あなたを根っこで支配してしまつている。
そのときが来るまでんびり待つていて、いざそのときになつて、何百回も頓挫を繰り返すうち、ついに、「本当だ」と氣づくようでは、いささか遅すぎるのだ。

テレビのワイドショーに向かつて大声でおしゃべりしている老人は、あ
りふれたこととはいえ、ちょっと不安に思える人だし、そこからさらにテ
レビ局に電話を入れて、全力でクレームを入れるのが日常になつている人
は、たぶん神経があまりまともでなくなつてている人だ。もちろん例外もあるのだろうけれど、例外の数にくらべて例外でない数のほうがきっと圧倒的
に大きいだろう。

「ジジイ、テレビに向かつておしゃべりしても、向こうに聞こえているわけじやないから……かといって、テレビ局に電話するのも違う。ジジイ、向こうは一視聴者のお前の意見なんかまったく求めていないし、まったく

必要ともしていなかから。目エ覚ませジジイ」

そのことがわからないのか、ジジイ。

もちろん、そのことがわからないからジジイなのだろうし、丁寧に言わ
れてもなおわからないから、ジジイはジジイなのだろう。丁寧に言わ
長いことテレビを観すぎて、自我に穴があき、自分の腹の中と電波が直
接つながっているように錯覚してしまったのだ。

「もう、テレビとおしゃべりするのやめてよ」

「なんやねん、うつさいなあ。別にええやないか！」

つぶやくということが、発信性を持つておらず、相手には届いている由
もないということ、それを把握している人は健全だ。

テレビで、いま流行しているスコッチの飲み方、みたいなものが紹介さ
れていて、

「こんな飲み方とか、見たこともないし聞いたこともないけど……」

とつぶやいたとき、そのつぶやきが誰かに届いているわけではない。

よくまあ、こんなウソを平気でつけるものだ、と感心して思うことがあ
るが、そう思おうがそうつぶやこうが、そのことは発信性を持たない。
誰にも届いていないのだ。

ジジイは、若い女性タレントがワイルドショリーに出ているのを見て、
「この子はなあ、あかんわ、年上に対する礼儀つちゅうもんを知らんわ」
と画面に向けて非難する。あるいは説教する。

でつかい声なので、それはもうつぶやきという範囲を逸脱している。

アイドルオタクは、

「茶髪にしたら一気に量産型になつたんじゃない？ 元の黒髪のほうがず
つと良かつたと思うけど」

と、画面に向けてつぶやく。
つぶやく、というアプリ操作をする。
ん？

すると、あろうことか、そのつぶやきは、なぜか知らないが相手に届く
ようなはたらきをするのだ。
「おい、赤の他人のアイドルとかいうやつに、いきなり髪型の注文ぶつけ

るのやめーや。相手は見ず知らずのただの女の子やろ」

「なんやねん、うつさいなあ。別にええやないか！ こいつらそういう商

売やし、しょせんファンあつてのアイドルやないか」

そういえば昔、おれは学生のころ、部活動で合宿に行つて、その宿舎の一室で、

「おい、やめろ。テレビ消せ」と言つたことがあつた。

後輩の、一年生が、テレビに向かって、

「あー、なんか、思ったほどキモくないわ。逆につまらん」

みたいなことをぶつくさ言つていたのだ。

それでおれは、やめろ、テレビを消せと言つた。

「えー、なんですか。深夜番組つて、こういう観方するじやないです
か」

「うるせえ。知らねえよそんなこと。少なくともおれの前ではやめろ。お
前が深夜番組をどう観るかなんて知らんわ、ただ聞いているこつちの耳が
汚れるんじや。お前個人で、家でやれ」

こんなもの、当時は強権発動なので、どうしようもなく、後輩は口をと
がらせて、いかにも不満ありげに、しぶしぶテレビを消した。

こんなの、いまだつたら完全にバワハラになるなあ。

いまはこんな粗暴な言いようは許されない。

許されないからといって、おれがそれをやらないということではないけ
れどね。

人は、さびしくなると、自我に穴があく。

老人は、さびしいので、自我に穴があき、テレビに向かっておしゃべり
をするようになる。

テレビに向かっておしゃべりしても、向こうには届いていないのだから
けつきよくさびしいかぎりだ。

老人といつても、最先端の宇宙物理学を研究している老教授などは、さ

びしくないので、テレビに向かっておしゃべりはしないだろう。

ツイッター（X）はこうしたわれわれのさびしさの状況につけ入つてき

た。

さびしさにつけ入るというのは、ポケベルのところから変わっていない。し、テレクラのところから変わっていない。

テレクラって……むかし、テレホンクラブというのがあって、要するに電話媒体での出会い系商売があつたのだ。この番号にかければ誰かしら不明の異性に電話がつながるというような仕組み。今までいえば、スカイプとかでする出会い系チャットのようなものだ。

人は、さびしくなると自我に穴があくので、たとえばさびしいおじさんは、キヤバクラのお姉ちゃんと、交友関係があるような錯覚をする。キヤバクラのお姉ちゃんはもちろん、その錯覚に乗つかつて、その錯覚を満たしてやるためにサービスをするのだ。

赤の他人のいるところで、酔っ払ったおじさんが、カウンターに突つ伏

し、

「あんの、クソ部長め……」

とつぶやいたところで、赤の他人は話を聞いてくれない。

でも、スナックのママがいたら、

「あらあ、どうしたの。何か、イヤなことでもあつたの」

と色よく聞いてくれるのかもしれない。

おれは先日、あるテレビ番組を観ていて、はつきりと○○したというか、おれ自身とは異なるものを見た。

(思わず伏字にしてしまつた)

ある女性タレントが、誰かのことを指差して、

「お前が悪いんじやん！」

みたいなことをでっかい声で言つたのだ。

何についての非難かというと、ある男性タレントが、交際中の彼女とうまいかず、彼女と別れることになつた、とかいうようなことについての非難だ。

その破局は、彼女のせいではなくて、お前が悪いんじやん、ということへの指摘と糾弾なのだと思うが、それにしてもおれはひたすらびっくりしたのだった。

おれは、他人の色恋沙汰というか、他人の付き合つたとか別れたとかについて、そんなに堂々と口出しする気になれない。

仮にその男性タレントが、おれに向けて、

「おれが悪いですかね？」

と訊いてきたとしても、おれは第一に、

「うーん……さあ、どうとも」

と言いよどむだろう。

つまりおれは、他人であるおれが、それぞれ個人の営んでいることに、口を差し挟むということじたいに引け目を覚える。

自慢じゃないが、おれは、クラスメートの誰かが誰かに告白するという展開になつたとき、クラス中がヒューヒュー言い出して色めき立つたとしても、それを見ないようにしてトイレに立つタイプだ。

陰キャだと言つているのじやないぞ。

他人の営むことに、口出しさしたくないし、そもそも窺視したくないのだ。

おれの言つてることはそんなにキチガイじみているだろうか。

もしおれが、誰かアイドルのファンになり、おれなりの「推し」を持つたとしても、そのアイドルが引退するときには、事情の説明なんかしてほしくない。

誰かいい人が見つかつて、交際していくとか、そういうことがあつたとしても、そんなことと言わなくていいし、あるいは病氣で引退するということがあつたとしても、その病名まで詳しく言わなくていい。

つぶやき文化以降、人々の自我には穴があいてしまつた。

テレビ番組といって、ほとんどの番組は舞台裏やプライベートを窺視するものばかりになつたし、人々の話題にのぼるのも、「裏の顔」みたいなことばかりになつた。

おれはボン・ジョヴィがプライベートでどんなセックスをしているかなんて一ミリも知りたくない。

プライベートを窺視した結果、キモいと思うのではなく、そもそもプライベートを窺視しようとする発想・基本動作じたいを、おれはキモい

と感じている。

悪趣味に踏み込んでの悪ふざけ、というのはもちろんわかるのだが、そのことに迫力で飛びついているのが、おれにとつてはまったく不可解で気持ちが悪い。

橋本環奈が、年収をどれぐらい稼いでいて、裏でマネージャーへの当たりがどうキツくて、プライベートでどういう男が趣味なのか、おれは一ミリも知りたくない。

人は、さびしいと、自我に穴があくのだ。

ということは、いま、人々はじつは猛烈にさびしいのだろうか？

【人はさびしいと自我に穴があく】

困った。

アデランスにシーチキンを発注してしまった。

なんでそんなウソを書くんだ？

エッセイというのは、基本的にウソを書いてはいけない。

しかし、九折大先生の叡智が大爆発する。

鉄板の中身は何があるか。

鉄板の中身は何であるか。

鉄板の中身は鉄だ。

すべては終わつた、いつものあの坂道を散歩しにいこう。

こんなのは、エッセイのふりをした詩文でつせ。

ようやく、おれはおれ自身の本質を掴んだ気がする。

こいつ、けつこうどんでもないことをしていやがる。

いつものあの坂道を散歩しにいくというのがどんなに豊かなことか。魂魄がうによよんしているのが手に取るようになる。

われわれには中身がない。

本当は中身がないのだ。

うげえ、そんなのもうめちゃくちゃでつせ。

めちゃくちゃな思い違いじゃないですか。

そのとおり、本当に思い違いなのだ。

こんなでたらめに見える話が声として聞こえるのはヤバイヤバイ。

われわれには中身がないので、何かを知るということはできない。

知る、ということはできないし、識（し）る、ということもできない。

錯覚なのだ。

錯覚を作り出す仕組みがちゃんとある。

何かを知る・識ると、われわれはそれが自分の「中」に入つたと思い込

鉄の板

むけれど……

われわれにはそもそも内部がない。

ぜつてーわかんねえよこんな話。

ただ何か、この文面からヤバイものを体験するだけだ。

それでよろしい。

鉄板に中身はない。

鉄板の中身は鉄だ。

だからわたしに中身はない。

わたしの中身はわたしだ。

鉄板は鉄ですと言っているままだな。

鉄板の中に目玉焼きは入らないように、あなたの中に知る・識るなんてことは入らない。

鉄板は鉄ですと言っている（本来は）作用力はない。

森林が砂漠化しているとして、それを知つていようが知つていまいが、

森林は砂漠化する。

森林が砂漠化しています、というウソのニュースを聞かされると、あなたは「緑化しよう」と言い出しが、森林は砂漠化しておらず、あなたは「なんだ」と肩透かしを食らう。

それはあなたの不要な苦しみだ。

あなたは自分に中身があると思い込んで苦しんでいる。

作用力を錯覚している。

鉄板をハンマーでド突きました。

鉄板をド突きつづけると、鉄板はフライパンみたいな形になりました。さらにそのフライパンをド突きつづけると、中華鍋みたいな形になりました。

した。

それをさらにド突きつづけると、鉄板は花瓶みたいな形になりました。

ん？

花瓶を覗き込んでみよう。

花瓶には穴があいているから、覗き込むことができる……

ように思える。

でも正しくは、花瓶には「口」があいている。

穴があいているわけではない。

トポロジー的に言つて、花瓶に穴はあいていない。

ここであなたは、トポロジーという語をGoogleで検索し、どうしようもないわけのわからなさに直面し、引き返してくるだろう。

Tシャツにはいくつの穴があいているか。

四つと言いたくなるけれど三つだ。

首先と、袖口の二つと、裾と、計四つに思えるが、別の考え方をしよう。

一枚の布を用意し、それに三つの穴をあけるのだ。

三つの穴をあけたら、あなたはそれを「着る」ことができるだろう。

真ん中の穴に頭を突つ込み、両隣の穴に右腕と左腕を突つ込む。

すると、布の外周があなたの身を覆い、あなたはその布を「着る」ことができる。

だからTシャツの穴は三つ。

花瓶の穴は？

花瓶の穴はゼロだ。

あなたは一枚の鉄板をハンマーでド突いて、変形して花瓶にしたじやないか。

もともと鉄板に穴はあいていなかつただろう。

だから花瓶に穴はゼロだ。

鉄板の外周が、花瓶の「口」になつただけだ。

ここでわれわれは誤解を生み出す。

花瓶には「中身」があるよう見えるのだ。

花瓶の中には水を入れることができる。

われわれの中には何かを入れができる、気がしてくる。

花瓶の中に入れるができるようになるように思えてくる。

入れることができるよう錯覚なのだ。

われわれは鉄板であつて、鉄板の中身ではない。

あなたは0歳のとき、鉄板として、この世に生まれてきた。

0歳のときには中身がないので、まだ何も知らないし、まだ何も識らない。

ただの鉄板だ。

それあなたは、八十八歳になつたときに、何になつているのか。

いや、鉄板は鉄板だろ。

八十八年間で、いろんなものを知つた・識つたと、思い込むだけだ。

それが自分の中身だと錯覚するのだ。

おれは、現代について、自我に穴があくという説明をしている。

自我に穴があけば、つぶやきが放出されるし、つぶやきが流入するだろ

う、それはわかりやすい話だ。

わかりやすさのためにそう説明しているのだが、どうやらガチの真相は

違うらしい。

本当は、自我に口があく、ということのようなのだ。

口があくということになると、ますます、そいつはあれこれつぶやきそ

うではある。

われわれは自我を「中身」だと思い込んでいるのだ。

中身とは、知る・識るの「溜まり」だな。

花瓶の中の水のように。

それを自我だと思つている。

デカルトは、「我思う、ゆえに我在り」と言つた。

それは、「水溜まる、ゆえに花瓶あり」と同じだ。

デカルトの言つていることは、誤りではないが、誤解の種になつた。

鉄板は必ずしも花瓶の形にならなくていい。

水が溜まらなくとも鉄板は存在する。

花瓶に水が溜まるということに比べると、観測できないので、確かに

さが得られず、つまり確かめられないでの、不確かだということだが、そ

れにしても鉄板は存在する。

不確かであれ、存在の本質は鉄板であつて、花瓶の形が存在の本質ではない。

デカルトは、鉄板の存在、「我」の存在を、「中身」によつて、確かめら

れる」と言つただけだ。

「平助さん、最近、ウチの酒が、ヘンなにおいするんでさあ」

「なんだつて。じゃあちよいと、おいらが推理してやろう」

「頼りますよ」

「まずおいらが推理するのはなア、お前んちには酒瓶があるつてこつた！
あるいは酒樽か、おちようしか、酒の枡つてこともあらあ。なんにしても
そういう物がある。どうだい、この推理は、図星のどんびしやつてどころ
だろう」

「あんたねエ、そりやあ、当たり前すぎるつてもんですよ。こちとら酒の
においがヘンだつて話をしているんですから、そりやあ家に酒瓶があつて
当たり前ですよ」

「酒匂う、ゆえに酒瓶ありつてなア」

「あんた何の話をしているんです？」

われわれは、もともと自我を球体のようなものだとイメージしている。

球体の中身は空洞だ。

空洞ということは、空っぽということだ。

空っぽではさびしいので、われわれは球体に穴をあけようとする。

本當には、穴ではなく口をあけるのだが、われわれはそれを穴だとイメー

ージする。

そしてじつは、穴をあけなくとも、もともとその球体には口があいてい

る。

なぜなら、もともとの形は平たい鉄板だからだ。

「穴」と言つているが、じつは「輪つか」も「空洞」も同じ穴であつて、

次元が違うだけだ。

(詳しく知りたい人はトボロジーをやつてゐる数学科の奴に訊け)

トボロジーの言い方とはズレるが、「面積だけある穴」が輪つかで、「体

積まである穴」が空洞だ。

なんにしても、本當は、鉄板には穴はあいていない。

穴の話が出てくることじたい、われわれが錯覚の見当違いの的外れの中
にいるということを示している。

鉄板が変形して花瓶の形になりうるというだけだ。

鉄板を変形させて花瓶の形にしたとき、わざわざ「穴」はあけなかつたろう？

おれの言つてることは単純で、「わたし」というのは、その鉄といふ素材だ、と言つてはいるだけだ。

これが一般には、「わたし」というのは、花瓶の中に溜めた何かだ、と思われているということ。

蓄積的なもの、貯留的なものだと思つてはいる。

そしてそれを、ドカーンとかドバーッとか、チヨロチヨロとかやるものだと思っている。

おれは、「自我の中には『わたし』しかない」とよく言う。

それ以外のものが入つてはいるのは根本的に誤りなのだと。

そしてこの話は、たいてい、自我という球体の中に、わたしだけが孤立して閉じ込められている、というイメージで捉えられる。

そうではないのだ。

もともと球体ではないし、その内部空洞が「わたし」と言つてはいるのでもない。

一般にはどうなるか。

球体の中身は空洞だ。

空洞は穴であつて、「空っぽ」だからさびしい。

つらい、というぐらいにさびしい。

单なるさびしさではなく、キツึいさびしさなのだ。

それで、球体に穴をあけ、外部のものを内部にインさせ、煮詰まつた内部のものを外部へアウトしようとする。

そんなものがコミュニケーションになるかよ。

そんなものはコミュニケーションにはならないのだが、なにしろ自我の根本、自我の象（かたち）を誤解しているので、コミュニケーションといふと、そういうものという感覚しかなくなる。

つまり、球体にあけた穴から、ホンネをドバッと出し、相手の穴にぐいぐい流し込む、それがコミュニケーションだと思われている。

向こうもそう思つてはいるので、やはり向こうも穴からホンネをドバッと出し、こちらの穴にぐいぐい流し込んでくる。

その作用力の強度を競いあつてはいる。

どちらがより強い水圧で、また大きな水量で、ドバーッとぶちまけてくるか、ズゴーンと流入させてくるか、そんなことを競いあつてはいる。

んなアホな。

「やいやい、おれは強盗だ。殺されたくなればサイフをよこせ」「ひえええ、命だけはお助けを。財布、財布をわたせばいいんですね」

「そうだ財布だ、早くしろ」

「じゃあ、いま、お金とカード類を取り出しますから……お札と、小銭

と、クレジットカード。病院の診察券も。抜き取つて、これでよしつと。はい、これどうぞ、サイフです。これけつこう高かつたんですよ」

「てめえ、バカやろう、これはただのサイフじゃねえか」

「サイフをよこせつておつしやつたじやないですか」

「バカやろう、これじやまるで、おれがサイフコレクターみてえじやねえか。そうじやねえ、サイフの中身をよこせつて言つてんだよ」

「じゃあ最初からそう言つてくださいよ。まったく、あんたがサイフをよこせなんて言うから、こんな二度手間に……ところで、わたしの診察券なんか何に使うんです？」

「そうじやねえ、診察券は要らねえよ。サイフの中身といつても、中身のうち金目のものをよこせつて言つてんだ」

「そんな、あなた、言うことが二転三転するんだから、もう。あつ、ほら、あなたがもたもたしているから、おまわりさん来ちやいましたよ」

「ちつ、バカやろう、覚えてろよ、ちくしょー」

一般には、中身のやりとりがコミュニケーションだと思われている。

中身に、意見や正論、モチベーションや、知識や趣味、思いや感情やこだわりなどを溜め込み、それを煮詰めてホンネにまで熟成し、ドバーッと流出させるのがコミュニケーションだと思われている。

じつさいには、そんなことでコミュニケーションにはならないので、お互いにどこかで「キツい」と感じている。

楽しくやつているうちはいいけれど、蓄積的に、正直しんどくなるのだ。

しかも、しんどくなる上に、誰かとコミュニケーションしたという感触もけつきよくないので、人はますますさびしくなっていってしまう。

ここは精密に理解しろ。

お互に内容物を交換しあうだけだから、そこに「誰か」はないのだ。

コミュニケーションした結果、なぜか、誰もいないという感触だけがあるに残るので、ますますさびしいということになる。

でも、そのコミュニケーションのつもりのやつで、もうしんどくなつているので、これ以上はもう無理、とギブアップしている。

このさびしさと、無理さを、いつたいどうしたらしいのか。

それで人々は「つぶやく」ということに行き着いた。

ウェブ上であれ対面であれ、

「これはつぶやきなのだ」

というやり方を発見した。

内容物の放出、そのコミュニケーションならざるもの、

「つぶやきだから」

という言いようで人の面前へぶちまけることにした。

むちやくちやだ。

むちやくちやだけど、本当にもう、元のやり方がわからないのだからしようがない。

おれは意地悪を言つているのではない、どういう経路で迷子になつたのかを説明しているだけだ。

コミュニケーションといって、そんなの、あなたの目の前で、おれが無言で手巻きたばこを巻いているだけのほうがマシだ。

おれからは何も漏れ出てこない。

おれからは何も放出されてこないのであなたは疲れない。

おれが手巻きたばこを巻いているだけで、あなたは、

「わー、九折さんだ」

と体験する。

おれは、

「ん？」

としか言わないだろう。

おれからぶちまけ放出するものなんか何もねえよ。

おれは花瓶じゃないし、穴のあいた球体でもない。ただの鉄板なんだか

ら、内容物というものがそもそもない。

内容物がないのだからぶちまけようがない。

おれは容器じやねえんだぞ。

なんでこんにちの奴らアみんな容器になつちまつたんだ。

おれはオープンになろうとしているのではない。

容器じやないのだからオープンもできない。

ただの鉄の板だ。

生まれたときに鉄の板で、死ぬまでずっと鉄の板だ。

たぶん死んでからも鉄の板だな、何も変わらないだろう。

内容のないおれの話を聞かせてやろうか?

うーん、まあいい、話してやろう。

話すまでもないようなことだが……

あ、インターネットが鳴った。

発注したシーチキンが届いたので、ではまた。

〔鉄の板〕

十五年

つぶやきの病の

真相

コンテナに入っているものを英語でコンテンツと呼ぶのだ。

あなたの体は安いでいる。

コンテンツはあなたの内部に流入する。

それであなたは自分の中身が充実したようと思う。

中身が充実したので、さびしくない、という気がする。

このあたりではあなたはよくわからなくなってくる。

中身が充実しているのにさびしいわけはないはずだ、とあなたは考える。

あなたはいつのまにか、中身が自分だと思うようになつていてる。

つぶやき文化の中、あなたは自分の中身を漏らす。

それがコミュニケーションだと思うようになつていてる。

あなたは知恵をこらし、頭をひねつて、ちょっと気の利いたつぶやきを

投稿した。

それは少しだけバズった。

あなたの漏らしたつぶやきは、多くの人に受け入れられた。

あなたの中身が、漏出して、誰かの内部に流入していった。

あなたはそれがコミュニケーションだと思い、それが、自分が承認されることだと感じた。

承認されたあなたは少し自信を持つことができた。

中身をさらに充実させ、割と自分の得意分野では負けないという気がしてくると、あなたはますます自信を持つようになつた。

あなたの中身は、しょっちゅう誰かの内部に受け入れられていく。

気づくと、あなた自身がコンテンツみたいになつていてる。

あなたは自分の有益な中身を、さらに広く受け取つてもらうため、

Youtube で動画を作成した。

数万人がそれを視聴して、数百人が「いいね」をつけた。

このときあなたは自分にコミュニケーション能力がないなんて思わない。

アレを呼びたいと思ったら「アレ」と呼べばいい。

それはコンテンツではなかつた。

コンテンツというのは「内容物」だ。

自分が誰にも受け入れられていないなんて思わない。

自分には、物事や考えを的確に伝える表現力があり、登録者数から考えて、「いまけつこう、認めてもらっているんだよね」とあなたは思う。

あなたはじゅうぶんな自信をもつて生きている。

他にも、中身が充実している人たちがいて、彼らと知り合うことで、自分なんてまだまだ

と思った。

彼らのことを、濃いメンツを感じ、彼らと中身の授受ができる仲にあるのは、自分にとつて自負と誇りに思えた。

グロいと言わると、あなたはなぜかギクッとする。

グロいなんて言われるところあたりはどこにもない。

けれどもなぜか、グロいという一言は、あなたにとつて聞き逃せないやバさを秘めている。

あなたはふと、知り合いに、

「なんかさあ、とつぜん、意味もなく死にたくなられ？」

と言いく出すようにもなった。

女子中学生が、友人同士で TikTok を撮影し、制服姿で短いスカート、じゅうぶんに膨らんだバストを揺らしてアピールし、直後に照れくさくなつて、恥ずかしさに笑つて録画を切る。

投稿された動画は「かわいい」「エロい」「天使かな」「あら~」と絶賛だ。

女子中学生の彼女たちはグロい。

グロい？ そんなはずはない。

何万ものファボがついている。

ここでグロいという見当はずれの指摘がされていることについて、あなたはどこまでも不可解に思う。

けれどもやはり、なぜかそのグロいというのが聞き逃せない。

ビール瓶コレクターと称する人が、テレビ番組に出て、そのことへの造

詣の深さと知識の一端を番組出演者らに披露する。

変わり種だが、自分が好きになれるものを持つていて、独自の世界を開拓しているんだな、というふうに思える。

「わりと、認めてもらっているんで」

何がグロいのか？ どこにもグロいところは見当たらない。

けれどもやはり、なぜか聞き逃せない。

グロい理由を教えよう。

中身が自信になっているからだ。

中身の充実や、中身の正しさ、中身の強さが、自信になつていてる。

本当は自信なんてゼロなのに。

全身・全体から漂つてくる自信のなさがある。

まるで肉のすべてが怯えているような。

にもかかわらず、自信に満ちた態度で振る舞い、自信に満ちた物言いを

し、自信に満ちた挙動をする。

控えめなふり、をいちおうはして見せるけれど、電波やウェブで何十万

人にも觀察されながら、堂々としているというぐらいに自信がある。

でも自信があるわけがない。

ビール瓶コレクションで自信を得ることはできないし、女子中学生が性的にそそると、いうことで自信を持つこともできない。

にもかかわらず、自覚的には自信があるのだ。

「わりと、認めてもらっているんで」

承認欲求が満たされているからこそ自信がある。

これらの自信がすべて、見当違ひのものだったとしたら。

特定の人たちだけではない、ほとんどすべての人たちが、その見当違ひの、本当には自信でないものを、いつのまにか自信だとと思い込んで、十五年を過ごしてきたとしたら。

膨大なグロさが水面下に蓄積することになるだろう。

個人的なことではなく、もはや疫学的なレベルで、そのグロさは、暴かれないとまま蓄積している。

外国旅行の、高級ホテルでの二泊三日を、インスタグラムで発信する。

「とつても素敵な体験になりました」

という一言を添えて、画像と動画を投稿する。

自分が旅行したのだから自分が体験したものに思える。

けれども本当はそうではない。

体験にはなっていない、とても残念なことながら。

体験にはなっていないから、他人にシェアできているのだ。

人は自分の見た悪夢を他人にシェアできない。

体験はシェアされないので。

自分の見た悪夢で他人が恐怖することはできない。

体験じたいをもたらす作品の主客でも成り立たせないかぎりは、他人を

体験にいざなうことはできない。

高級ホテルでの二泊三日は、自分の中身になつただけだ。

中身といふものは、取り出すことができるし、漏出させることができ

し、放出させることもできる。

自分の中身といふものは、比率を帯びた情報でしかない。

いちおう早稲田大学卒です、という学歴をSNSで放出することはでき

る。

早稲田大学は、上位の大学だという比率を帶びている。

高級ホテルといふのも、安ホテルとならべたとき価値が高いといふ比率

を帶びている。

だがそれは情報であつて体験ではない。

百本の映画を観たとき、全員が百本ぶんの体験をするということはまったくない。

記憶力がよければ、映画の百本を自分の「中身」にすることができるが、それは映画の作中を体験するということではない。

自分の中身とは何か。

自分の中身とはセルフ・コンテンツだ。

人々はいま、セルフ・コンテンツを放出している。

まるでその内容物が自分だというように。

もしその内容物が本当に「自分」だったら、人は大きな自信を持つこと

ができるだろう。

自分の内部に、強い思いや、強い衝動、強いであろう正論や、強い主張、強い意見、強い感情、そうしたものが、高級ホテルでの宿泊とともに、内容物として入っているのであれば、内容物は膨大だ。

膨大で、強くて、充実している。

もしそれら内容物が「自分」だというなら、この人は大きな自信を持つ

ことができるだろう。

でも、もし内容物が「自分」ではないのだとしたら。

現代のグロテスクさはこのことにある。

自分ではないものを自分だと思っている。

内容物を自分だと思っている。

だから何でもかんでも自分の中身に流入させ、なんでもかんでも自分の中身といふものは、自分の中身になつただけだ。

自分の中身といふものは、取り出すことができるし、漏出させることができ

し、放出させることもできる。

自分の中身といふものは、比率を帯びた情報でしかない。

いちおう早稲田大学卒です、という学歴をSNSで放出することはでき

る。

「〇〇は謝罪すべき」

「知り合いに自分の才能を指摘してもらつた。思いがけない指摘だつた」

「月に十冊、本を読む習慣をつけています」

「なんで男ってさあ」

「せっかくなので〇〇してみた」

「おれの推しは××だけど、△△ちゃんのこともすなおに尊敬する」

「あれはアイツが悪いでしょ。言わせてもらうけど」

「早く平和が戻つてほしいと思います」

「あのさ、身だしなみとしてダサすぎんじやん?」

「うわあ、でっかい船ですねえ、びっくりしたあ、おどろきますよ」

「僕けつこう動物とか好きなんですよね」

「自分でぜつたいのルールがあつて」

「この食べ方マジでおすすめなんで、よかつたら見ていつてください」

電車の中にカップルがいて、イケメンの彼氏がすごくいいことを言つて

いた

「三十歳までにやつておいたほうがいいことが五つある」

「食べ方が汚い人って、なんか根本的に人として信用できない感あるわ」

「こういう歩き方をする人って、典型的に仕事ができない人の特徴なんだよね」

「この□□ってお笑い芸人のことを、最近どこか認めている自分がいる」

「こうしたもののですべてを「自分」だと思ってる。」

「自分に流入するものを自分だと思つており、自分からつぶやき放送出するものを自分だと思つている。」

「もしそれらがすべて、「自分」ではないのだとしたら。」

「この十五年間、「自分」は何もしてきていないということになる。」

「何もしてきていないし、何も得てきていないし、何にも触れてきてないし、何も生きてきてない。」

「十五年間、内容物のぶちまけあいをしてただけで、十五年間、誰とも話していらないし、誰の声も聴いていない。」

「十五年間、自分の姿もなければ、自分の声もなく、自分の話もなく、自分の生もなかつた。」

「あつたのは「内容物」の、無節操な貯留と放出だけ。」

「こんな大規模なグロテスクさに、もはや誰も向き合うこととはできない。」

「自分の内部に、作用力のある外部のものが流入することを、ユング心理学では自我インフレーションと呼ぶ。」

「ただ、そうした心理学はへたすると百年近く前のものなので、現代のわれわれにきれいにはあてはまらない。」

「電腦通信が端末化までされ、人々が一日あたり五億件のつぶやき文化を生きるというようなことは、ユングの時代の前提にない。」

「内容物は自分ではない。
内容物が自分だと思っている。
内容物に自信がある。」

「けれども自分に自信がない。」

「自信のある、充実した面持ちで、しかし当人はスッカスカだ。」

中身は充実しているはずなのに、ものすごいきびしさを抱え込んでいた

自殺をささやきかける現代の若いポップスが染みわたる。

中身はパンパンなのに、自分はスッカスカだ。

セルフ・コンテンツは「自分」ではない。

わたしは一般の人よりスコッチに親しんできて、モルト専門のバーに行くと、並んでいる銘柄のほとんどにこころあたりがあるが、それはわたしの内容物にすぎず、いかなるスコッチ瓶も「わたし」ではない。

そんなものがわたしである必要はない。

わたしがスコッチを愛しているのは事実だし、特別に思い入れのある銘柄があるのも事実だが、それを放出して誰かの内部に押し込もうとは一ミリも思わない。

おすすめのスコッチの銘柄なんてどこにも書いたことがない。

わたしのことを、スコッチに詳しい人と承認してもらわなくてけつこうだ。

わたしは、フルサイズとフィルムカメラを含めた一眼レフを三台持つているが、二十年近くウェブサイトを運営ってきて、自分の撮った写真をわけもなくアップロードしようとしたことは一度もない。

わたしがここにずいぶんな長さで書き話をだらだら示しているのは、あなたに「おれ」を体験させるためであつて、おれが自分の内容物をぶちまけるためではないし、おれの内容物をあなたの内部にブチこむためでもない。

あなたはおれの同一性を体験するのであつて、おれの内容物を知るわけではない。

「わたし」とは何なのか。
「なんどでも言つておく、まず内容物は「わたし」ではない。
あなたがこれから二百種類のスコッチを飲んだところで、それらのスコッチは「あなた」にはならない。
多くの人が、本当にこのことを誤解しているのだと思う。」

「わたし」とは何であつて、「わたし」はどのように承認され、「わたし」

はどのように体験されるのだろう。

うそも隠しもなく、はつきり言つておく。

おれはあなたの目の前に行き、眠たそうに座り込んで何も言わず、ただボーッと、手巻きたばこを手元でくるくると巻いていよう。

それだけあなたは、

「わー、九折さんだ」

と体験する。

必ずそうなると保証しておく。

おれのことを知らない人でさえそういうふうに体験するのだから。

もうこのあたりの事実に節度のフィルターをかけていられる状況ではなくなつた。

このときついでに、内容物がパンパンで自信のある笑顔のAくんも、おれの隣に座らせようか。

Aくんはにこやかに、あなたに自己紹介をしてくれるかもしれない。

あなたはAくんを体験するだろうか。

いいや、あなたはAくんのとなりでたばこをくるくる巻いている無言の九折さんを体験するばかりで、さわやかでイケているふうのトークをして

くれているAくんのことはなぜか「体験はできない」と感じる。

このときにおけるAくんが、どれだけグロテスクかわかるだろうか？

Aくんは、内容物がパンパンだが、自分がスッカスカだ。

Aくんは、自信にあふれているが、自信をまったく持つていない。

Aくんは、技巧派バンドでベースギターを演奏しているが、技巧的にはキマっているのに、そのサウンドはスッカスカだ。

この十五年間、何をしてきたか、とAくんに訊いてみるか。

Aくんはアゴに手を当てて、自信のある表情を作り、いろんなことを話してくれるだろう。

たくさん知り合いでいて充実している、みたいな話を聞かせてくれるに違いない。

いっぽうおれは、同じ質問に対し、
「さあねえ〜」

としか言わないだろう。引き続きたばこでも巻いていることにする。

あなたは、目の前のこの人が、とんでもない量の体験を得てきたんだ、

ということ直覚する。

直覚して、ドキつとして、なぜかあなたはうれしくなり、よろこんでしまう。

Aくんが自信を持てる道理などどこにもない。

でもAくんは自信たっぷりだ。

とてつもなくグロテスクな状況にある。

Aくんの同級生、Bくんは、いま若手のお笑い芸人として、賞レースにトライしている。

Aくん自身も、

「おれって割と、お笑いについて、自分なりの考え方を持つていてさあ」と言い、

「それで、Bとけつこう議論とかして、けつこういつも盛り上がり上げて。その議論の結果を、Bは実践に生かしてくれていたりするんだけど」と続けるだろう。

とても関心を惹く、興味深い話だ。

でもスッカスカにしか聞こえない話だ。何の関心も惹かれないし、何の興味も湧かない。

おれはそのへんの野草の葉っぱを引きちぎり、

「この葉っぱ、けつこういい匂いするの」とあなたに示そう。

あなたはその葉っぱにぜつたいの関心と興味を覚えるだろう。

あなたは自分もそれを体験したいということに一秒で吸い込まれているはず。

Aくんは公園のベンチに座り、足許をうろつくハトを見ていた。

あなたはAくんのとなりに座つてみた。

あなたはAくんの肉体の内部から、さわがしさを聞き取るだろう。

Aくんは、その無意味にキメている表情の内側から、ずっとぶつくさ、無言で何かを云っているのだ。

ず一つと何かを思い、ず一つと内心で何かをつぶやいている。

うるさい。

隣にいるだけで圧迫感がある。

あなたは数十秒で、Aくんのとなりにいるのを「しんどい」と感じ始め

る。

そのとき、おれも無意味にハトを見ていたとしよう。

こんどはあなたはおれの横に座つてみる。

あなたは、おれの全身がとてもなく静かだということに驚愕するだろ

う。

内部に何の思念もなく、内部に何のつぶやきもない。

少なくとも、何かが漏れ出てくる気配は一切ない。

あなたはなんとなくおれの肩を指で押してみた。

おれからは何の反応もない。

何の反応もないが、あなたは「九折さんに触れた」「何か、すごく軽いの

に、みつしりしていた」という体験をするだろう。

あなたはAくんの肩も指で押してみた。

Aくんからは、

「ん？ あはは、何？」

という強い反応が返ってきた。

けれどもあなたは、Aくんに触れたという体験はせず、ただ「うわっ」という心理的のけぞりだけを体験するだろう。あなたの指先には、「なんかすっごく重くて、疲れているというか」「なんか、物体、みたいな感じがあつて、すごくしんどそうな感じがした」という感触が残っている。

Aくんはアゴを脱毛しているので、アゴがつるつるだ。

いっぽうおれは、もはや不審者かよ、というほどの無精ひげを放置している。

そのときあなたは、Aくんのアゴを「グロい」と感じるのだ。

あなたがよっぽどスケベで、セックスフリークで、頭の中にそれしかなかつたなら、つるつるのアゴに欲情するかもしれないが、そうでないかぎり、あなたはなぜか、脱毛されてスキンケアもされているAくんのアゴを

「グロい」と感じる。

なぜグロいのだろうか。

そもそもグロいのはどういうことだろうか。

あまり専門的に説明すると長くなるので、はしょるが、グロいというのは「壊れて稼働している生体」なのだ。

グロいからあまり詳しくは言いたくないな。

たとえば、心臓が稼働していることじたいはグロくないが、体内から取り出された心臓が単独で稼働しているのはグロい。

テーブルの上でむき出しの心臓がドクンドクン暴れていたらグロいだろう。

(やっぱりこの説明はやめよう)

Aくんは、自分の内容物が自分だと思っている。

「女性ってさ、けつきよく男よりは、繊細だから。肝腎なところでは、男が護つてやらなきやいけないって、おれ思うんだよね」と、Aくんは思つてゐるし、あなたに向けてそう語つている。

彼は、そういう思いとか、考え方とかの、内容物、あるいは放出物が、「自分が」だと思つてゐる。

「おれさ、子供のころに、兄と比べられて、悪く言われることがよくあつて。それですっごい傷ついたんだよね、当時。だからおれつて、差別を受ける人たちの苦しみが、よくわかるつて思う。そういうのつて、自分の中はずーっと残つていて、そんな簡単に消えてくれないんだよね」と言つて、Aくんは暗い顔をする。

そうした、当時の流入物や、現在の放出物が、自分なのだとAくんは思つてゐる。

そうしたいろんな思いがあるから、Aくんは一定の自信を持つてゐるのだ。

内容物はパンパンだから。内容物自信。

Aくんは自分の中身を、自分でまともだと思っていて、だからこそ自信を持っている。

おれには中身なんかない。

「初対面というのは、礼儀を重んじるべきだが、それはさておき、缶コーヒー買ってきてくれ」

「言うだろう。手元でたばこを巻きながら。
そうしたらあなたは、腰を浮かせて、

「えっと、ブラックですか。それとも、ミルクや砂糖入り……」

「と言うだろう。

「ブラックで」

「はい」

これに中身なんてあるの?

十五年、つぶやきの病の真相は。

自分というものを内容物だと思い込んだ。

内容物の充実、およびその強さとまともさが、自分の充実であり、自分の強さとまともさだと思い込んだ。

大量の内容物があり、それを菌床として、ニセ自信というキノコが生えてきました。

Aくんの自信は、自信ではなくキノコなのだ。

それがグロい。

これが十五年つぶやきの病の真相だ。

いまさらこんなこと引き受けられない。

いまさら、この十五年、なにひとつ「自分」にはなっていなかつたとい

うようなことは、もう引き受けられない。

スッカスカという、そのスカスカでいどがシャレにならなすぎる。

十五年つてデカすぎるだろ。

もう、ニセキノコを自信にして生きているのだから、いまさらそれをなしにするなんてことは、たぶん現実的に出来ない。

Aくんはまともに誰かと、「自分」として話したことなんかない。

だけどトーキングには自信があるのだからグロいのだ。

Aくんの知り合いのBくんもグロいし、スケベダンスではしゃいでいる女子中学生も、直に接触すると残念ながらグロい。

グロいというのは、キツいのだが、誰にとつてキツいかというと、本当は自分自身にとつていちばんキツい。

自分は自分自身から離れられないのだから。

だから、AくんもBくんも、あるいは場合によつては踊つている女子中学生も、おれのことを攻撃する。

攻撃なんか、されていいけれど、その攻撃はとつじょ始まるのだ。

とつじょ発生して、発生すると、それに取り憑かれて、彼らはその攻撃がやめられなくなる。

攻撃の動機は、自分自身のグロさだ。

自分自身のグロさというのは本当にキツく、本当に耐えづらい。

だから、自分自身のグロさというのは、大前提、「認められない」というのがほとんどのだ。

公園にいたおれは帰宅し、あなたとAくんは公園でふたりきりになる。そこにBくんも来た。

たまたま、Tiktok の女子中学生も、近くに来て踊るのを撮影している。

そのときとつじょ、Aくんがあなたに向けて、

「あのさあ、ところでさあ、さつきのオッサンやばくね? なんかいきなり、きみのことパシさせてたじyan。何あれ。ひよつとしていまどき、先輩気取りみたいなやつ? おれ見てて、マジでゾッとしたんだけど」

それに乗つかつてBくんが、

「ええ、何それ、何それ。なんか聞くだけでキモいけど」と加勢してくる。

「なんかさあ、きつたないオツサンがさあ、自分は年長者ですみたいな感じで、老害ムードかましてくんの」

こうして攻撃に転じると、人は、自分のことをグロいとは認識せずに済む。

この攻撃は、いつたん始まつてしまふと、不可逆のもので、もうやめられなくなるし、引き返すこともできなくなる。

引き返すということは、自分のことをグロいと感じたあの分岐点に引き

返すということだから、それはもう無理なのだ。

それぐらい、自分がグロいというのはキツい。「マジありえんわあ。いきなり何かエラソーに、パシらされて、きみ、内心めっちゃキツかつたつしょ。ごめんね、なんかとつぜんだったから、おれも止めらんなくて」

ここで注目しておいてほしいことがある。

このときAくんは、あなたの内心が、自分の内部に流入してきているのだ、というふうにまくし立てている。

仮に、パシらされたのがキツかつたとして、それはあなたにとつてのキツさだったはず。

Aくんにとつてのキツさではないはずだ。

だがAくんはあなたの内容物を、勝手に推測して、勝手に彼自身の内部に流入させる。

これも、この十五年の真相のひとつだ。

Aくんは、内容物を自分だと思っているので、自分の内容物に、強さと正義が欲しいのだ。

この場合、パシらされたあなたがキツかつたとしたら、被害者であるあなたは正義の側だし、その屈辱と無念の思いは、こんにち強い正義の作用力を持つている。

Aくんは、あなたに正義をけしかけて、あなたからの流出物をすばやくみずからの内部に流入させ、自分の内容物に強力な正義の作用力を取り込もうとするのだ。

正義ネタは、おいしい、と単純に捉えてもいい。

Aくんはもちろん、あなたの傷ついた（かもしれない）ところを思いやつたり、労わったりしているのではなく、ただこのときのあなたの内部を正義醸造所と見立て、そこからの正義の作用力を可能なかぎり自分の内部に輸入しようという目論見なのだ。

自分の内部を正義の作用力で満たせば、よもや自分がグロいかもなんてことは考えなくて済むようになる。

端的に言うと、現代は、そうして「グロさの押しつけあい」をしてい

る。

十五年間で溜まりにたまつた、世の中全体のグロさを、自分ではない他の誰かに押しつけて、自分だけは涼しい顔をして逃げ切ろうと思っているのだ。

自分でない他人がグロい目に遭えばいいと思つてているだけだな。

他人をグロい目に遭わせているうちは、自分のグロさに向き合わなくて済む。

長くなつた話もそろそろ終わりに向かつていこう。

人々は、「自分」を内容物と思い込むようになった。

内容物の充実が自分の充実だと思い込むようになつた。

内容物を菌床にしてニセ自信というキノコが生えた。

内容物を放出し、他人の内部に流入させ、作用力を及ぼすのが、自分の強さであり、自分の活動であり、自分のコミュニケートだと思い込むようになつた。

本当は、いま人々はスッカスカだ。

内容物はパンパン、自分はスッカスカだ。

自信なんか持つているわけがない。

十五年ものあいだ、「自分」は何にも触れてこなかつたのに、自信なんか持てるわけあるか。

まったく自信のない生体、スッカスカの生体が、煮えたぎる内容物の作用力で稼働している。

壊れて稼働している生体だからグロい。

グロいというのは本当にキツいことであつて、向き合いづらく、しかも自分自身がグロいなどということには、人はとてもじゃないが向き合うことができない。

だからグロさを他人に押しつけようとしている。

他人にグロさを押しつけて、自分だけなんとか最後まで涼しい顔で逃げ切ろうと目論んでいる。

そんなことをもちろん、それぞれが自覚しているわけではない。

自覚も何も、彼らは自分を内容物だと思っているのだから、自覚なんて

持つわけがない。

どれだけ清らかな内容物を自家生産し、おしゃれで潔い内容物を外部から輸入しても、自分のグロさは変わらない。

内容物をどれだけ清潔さと正義のてんこもりにしたとしても、おれが言及しているのは内容物のことじゃないのだから見当はずれだ。
おれが言及しているのは内容物ではなくて「あなた」だ。
仮にあなたが聖書と仏典のすべてを暗記して口唱したとしても、それは聖書と仏典があなたの内容物になっただけでしかない。

あなたの記憶力に、聖書と仏典というコンテンツがあるだけだ。

それはあなたの同一性にかかるる書物になつてているわけじゃない。
どうしたらいい、というような方法は存在しないけれど、ただ言えるのは、自分には中身なんてないということ。

あなたがいればよく、あなたの中身なんかなくていい。

あなたの世界と、あなた自身が、同一性に至つていれば、あなたの中身なんて、ありもしないものをあなたの内部に抱え込む必要はない。
おれには内部なんてないし、中身なんてないし、内容物なんてない。
ここまで読んでもおれの中身なんて一ミリも出でこなかつただろう。

書物でいいし、作品でいいのだ。
内容物、書物、と並べて書いてみる。

どちらも似たようなものじゃないか。

あなたは書物をあなたのコンテンツにしないといけないとと思うのだろうか。

あなたはいま、おれを読んでいる。

おれの書物は、おれの同一性のものだ。

おれに中身がない以上、おれの書物にも中身がない。

中身がないものを、あなたはどう受け取つていいのだろう。

この中身のない書物から、あなたはいったい何を受け取つていいのだろう。
あなたにとつて書物の受け取り方なんてひとつしかない。
あなたの同一性にするしかないのだ。

あなたがこの書物を同一性にするとき、この書物は「あなた」だ。

おれが書いたので、この書物は「おれ」だ。

だから本当に起つるのは、あなたとおれの同一性だ、ところうとになる。

これは、この十五年間、まつたくつぶやかずにつきた、おれの側の真実だ。おれに中身はなく、書物にも中身はない。あなたにも中身はない。書物が問われて、同一性はおれとあなたの同一性になる。

〔十五年つぶやきの病の真相〕

2025.02.01 九折空也